

平成 2 年 度

遺跡発掘調査概報

都之城跡(主郭部)

久玉遺跡(第3次調査)

宮ノ下遺跡

堂山(南地区)遺跡

牟田ノ上遺跡

屏風谷第1遺跡

都城市内出土遺物補遺

築池地下式横穴墓

1991. 3

宮崎県都城市教育委員会

序

この報告書は平成2年度都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告です。

掲載した遺跡は、都島町の都之城跡、郡元町の久玉遺跡、金田町の宮ノ下遺跡、九谷町の堂山遺跡、早水町の牟田ノ上遺跡、上水流町の屏風谷第1遺跡です。この他、昭和52年下水流町で発見された地下式横穴墓から出土した遺物も報告しております。

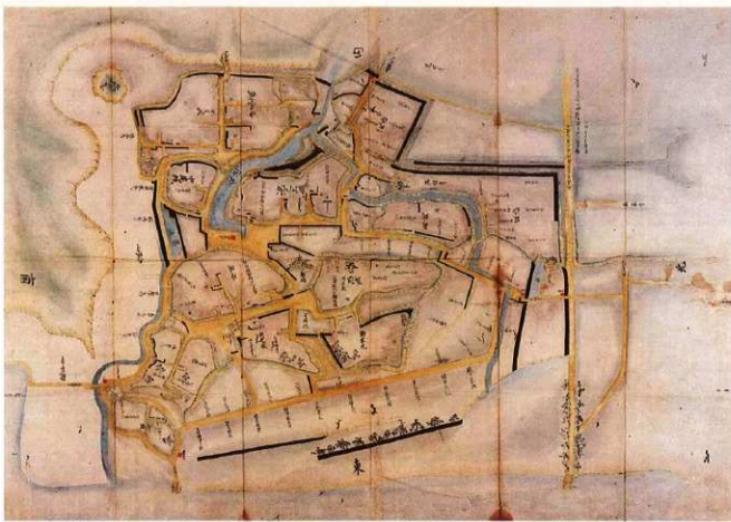
以上6件の発掘調査のほか取添第2遺跡の調査も実施しており、埋蔵文化財発掘調査は年々増加の一途をたどっております。言い換えると、発掘調査の増加は開発行為等の増加にほかならず、今後文化財の保護と地域開発との円滑な対応がますます迫られるわけで、関係機関等の一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後に、本書が市民の皆様の文化財に対する理解の一助となり広く活用されることを願うと共に研究資料の一つとなれば幸いです。

また、発掘調査から資料整理に至るまで地元関係者をはじめ多くの方々のご協力をいただきました。心より謝意を表するものです。

平成3年3月

都城市教育長
久味木 福市



▲ 都之城古絵図(都城島津家蔵)



▲ 都之城跡空中写真(東から)



▲ 青磁・白磁(右下は高台内に墨書有)



▲ 染付・赤絵



▲ 陶器各種



▲ 彩釉陶器・観・瓦経(右下)



▲ 精宝墨書土器



▲ 軒丸瓦(五七桐紋)

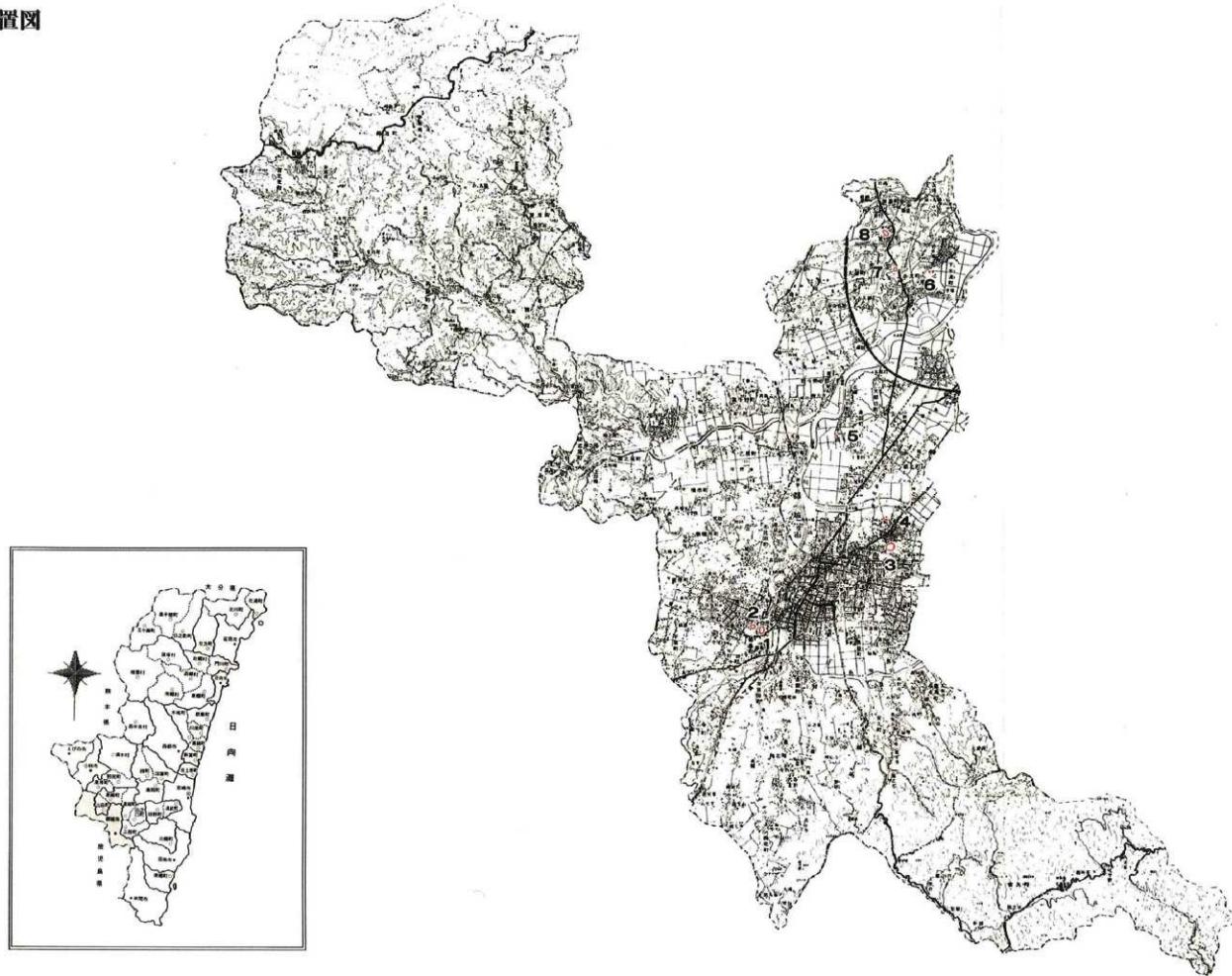
例　　言

1. 本書は平成2年度都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 掲載した遺跡は都之城跡（主郭部）・久玉遺跡（第3次調査）の概要報告と、中間報告として宮ノ下遺跡・堂山（南地区）遺跡・屏風谷第1遺跡・牟田ノ上遺跡である。その他、都城市内出土遺物の補遺として築池地下式横穴墓（昭和52年）を掲載した。
3. 本書の執筆者は各遺跡の末尾に記した。
4. 本書の編集は都城市教育委員会文化課が行った。

目　　次

I.	遺跡位置図	7
II.	都之城跡（主郭部）	9
	〈付論〉都之城について 八巻孝夫	47
III.	久玉遺跡（第3次調査）	57
IV.	宮ノ下遺跡	85
V.	堂山（南地区）遺跡	87
VI.	牟田ノ上遺跡	89
VII.	屏風谷第1遺跡	91
VIII.	都城市内平成元・2年度発掘調査一覧表	92
IX.	都城市内出土遺物補遺 築池地下式横穴墓	93

I. 遺跡位置図



1. 都之城跡
2. 取添第2遺跡
3. 牟田ノ上遺跡
4. 久玉遺跡(第3次)
5. 宮ノ下遺跡
6. 蓬池地下式横穴(1991-1号)
7. 屏風谷第1遺跡
8. 堂山(南地区)遺跡

II. 都之城跡(主郭部)

—第1～4次調査概報—

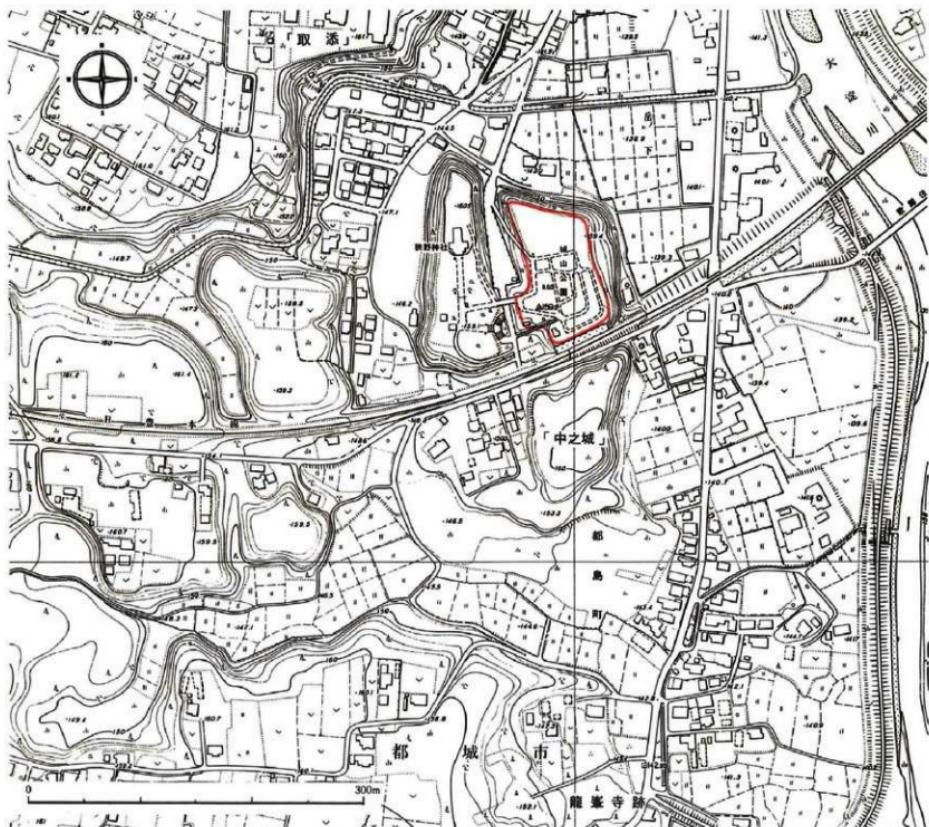
例　　言

1. 報告する遺跡は、都城市都島町803番地他所在の「都之城跡…主郭部」である。
2. 4次にわたる発掘調査は昭和63年から平成2年にかけて、都城市教育委員会が主体となって実施した。第2次と第3次は同市文化財専門員重永卓爾氏と同市文化課主事兼畠光博が調査を担当し、第1次と第4次調査は兼畠がこれにあたった。
3. 掲載した遺構実測図の作成は、重永、兼畠、が中心となって行い、調査補助員として、上田義明、長尾聰子、中村由美子（以上鹿児島大学学生）、横山哲英（熊本大学学生）、林皆子（愛媛大学卒）、野口虎男、浜田寛、大盛裕子、下田代清海、持永勝美、野間大作、持永富士雄らの助力を得た。また、一部、宮崎県文化課吉本正典氏、宮崎県史編纂室日高孝治氏、都城市文化課主事矢部喜多夫の協力を得た。
4. 掲載した遺物の整理・実測・製図は都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室において、兼畠、大盛裕子、荒木祥子、林皆子、猪股幸千代、池谷香代子、水上和子が行い、一部の実測に宮崎県文化課吉本正典氏の協力を得た。
5. 掲載した遺構・遺物の写真撮影は主として兼畠が行い、遺構の空撮については㈱スカイサーべイに委託した。
6. 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔高である。
7. 執筆と編集は兼畠が行った。なお、文献史料については文化財専門員重永卓爾氏の教示を受けた。
8. 都之城の繩張りについては中世城郭研究会会員八巻孝夫氏の玉稿を賜った。
9. 発掘調査中、熊本大学工学部教授北野隆氏、鹿児島短期大学学長三木靖氏、宮崎県文化課近藤協氏・北郷泰造氏・面高哲郎氏、人吉市教育委員会鶴嶋俊彦氏、新富町教育委員会有田辰美氏、鹿児島県文化課中村耕治氏、中井さやか氏の指導・教示を受けた。また出土陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏の鑑定を受けた。

1. 調査に至る経緯

都城市（農林振興課）は昭和61年林野庁の補助事業である木材需要拡大推進緊急対策事業の中のモデル木造施設建設事業として、城山公園（都之城跡）に歴史資料館建設を計画した。同所は都城市指定文化財であるが、昭和62年12月、都城市教育委員会によってその事業に伴う現状変更が承認されたため、同市社会教育課（文化係）は昭和63年5月から8月まで、歴史資料館建設予定地を含む主郭部曲輪の北半部約1,410m²の発掘調査（第1次調査）を実施した。

さらに、歴史資料館周囲に外壁工（石積工）の必要性が生じ、平成元年1月に再びその現状変更が承認されたため、同市文化課は平成元年5月から6月まで、資料館南側に沿った約390m²の範囲の事前調査（第2次調査）を実施した。なお、同年10月に歴史資料館がオープンした。



第1図 発掘調査区域及び周辺地形図

赤枠線内は発掘調査区域

一方で、平成元年4月に都城市都市緑地公園課からふるさとづくり特別対策事業に伴う城山公園整備事業が打ち出された。これに先立ち同市文化課は遺構・遺物の包蔵状況の把握とそれらの成果を整備に利用するために、平成2年1月から5月まで、主郭部曲輪の南東部約1,300m²の第3次調査を行った。続いて、同年5月から8月まで主郭部曲輪の南西部約840m²の第4次調査を実施した。なお公園整備事業は平成3年1月から始まっている。

2. 遺跡の位置と環境

都之城跡は宮崎県都城市都島町字本城・八幡城に所在する。地形的には都城盆地西側の起伏の少ない平坦な台地の東端にあたり、その眼下を大淀川が北へ流れている。標高は約159~160m程度で、周囲の低地（旧水田）とは比高差約10mを測る。

この城郭は都城島津氏（北郷氏）歴代の居城である。北郷2代義久は父資忠の薩摩守の城館（宮崎県山田町）から当地に移り、永和元年（1375）に「本丸」・「西城」・「中之城」・「南之城」・「外城」を構築し、東側を水之手口に、西の都島を虎口にしたと伝えられる。戦国時代には、北郷8代忠相が従来の城域の西南部に「新城」・「池之上城」・「中尾城」・「小城」を増築し、大手は西の「中尾口」、搦手は北の「弓場田口」、西北には「鷹尾口」、東には「来住口」、南には「大岩田口」の五口を設けたという。豊臣秀吉の九州征伐の後、文禄4年（1595）、北郷氏は祁答院（鹿児島県宮之城町）に改易となり、当城は伊集院忠棟の居城となった。忠棟の子忠真の在城時（慶長5年 1600）に「取添」が増築されたようである。島津氏と伊集院氏の対立に端を発した庄内の乱（1599~1600）の後は、再び北郷氏の居城となり、元和元年（1615）の一国一城令により廃城をむかえた。

3. 調査の概要

調査地点は近世初頭に描かれたと推定される都城島津家蔵の古絵図（口絵カラー）に「御本丸」と記載されている部分で、八巻孝夫氏による曲輪のグルーピングでは「川沿いの台地グループ」の中の曲輪Ⅰにあたる。（付論参照P49） 当該地は伝承からだけでなく、縄張りの地形的読み取りからも主郭部と目されるところであり、本書では主郭部と呼んでおく。なお、そのほかの曲輪の調査として、曲輪Ⅲ（「中之城」）が昭和57年5月～7月に、曲輪Ⅱ（「取添」）が平成2年5月～7月にいずれも民間の開発事業に伴って、発掘調査されている。（第1図）

4次にわたる発掘調査の総面積は約3,940m²におよび、主郭部曲輪の約60%を占める。

調査区域内は戦時中の諸施設の設置や戦後の昭和44年から昭和51年にかけて行われた公園整備事業によって、それ以前の遺構が若干破壊されていた。それに加えて中世の遺構も長期にわたる利用のためにおびただしい密度と著しく切り合った状態で検出され、調査は困難を極めた。

調査区内の土層は、地点ごとにかなり複雑な状況が認められたものの、およそ次のような基本土層を示すことができる。Ⅰ層…公園整備による盛土 Ⅱ層…灰オリーブ色砂質層

III層…オリーブ黒色砂質層　IV層…灰白色バミス層（桜島文明降下軽石　15世紀後半）
V層…黒色粘質シルト層　VI層…オレンジバミス層（御池降下軽石層）　IV層は中世の遺構・
遺物の年代決定に有効であるが、非常に薄い部分的な堆積であり、遺跡全体には認められない。
また中世城郭期の遺構は、一般的にVI層上面でとらえることができるが、VI層の残存していな
いところにおいては、それ以下のアカホヤ層等で確認した。なお、中世の遺物は主としてII、
III、VI層に包含されている。

発掘された遺構のうち中世以前のものとしては弥生時代の竪穴住居跡1基のみであり、ほと
んどが、中一近世のものである。それらを以下に列記すると、堀状の道路跡、門状遺構、建物
跡（据立柱）、柱穴群、土坑、溝状遺構、塙跡、鍛冶工房跡、地鎮・鎮壇遺構などである。発
掘された遺物は、中世以前のものとして、縄文時代の土器や石器および弥生時代の土器など
がある。中世以降の遺物は、城郭の伝承上の存続年代にはほぼ対応する14世紀後半から17世紀初頭
にかけてのものが質量ともに卓越している。その内容は土師器（かわらけ）、瓦質土器、船載
や国産の陶磁器、銭貨、石臼、金属製品、金属加工関連遺物、漆器、土錠、火縄銃の弾丸、瓦
など多岐にわたっている。

4. 遺構と遺物

(1) 遺構

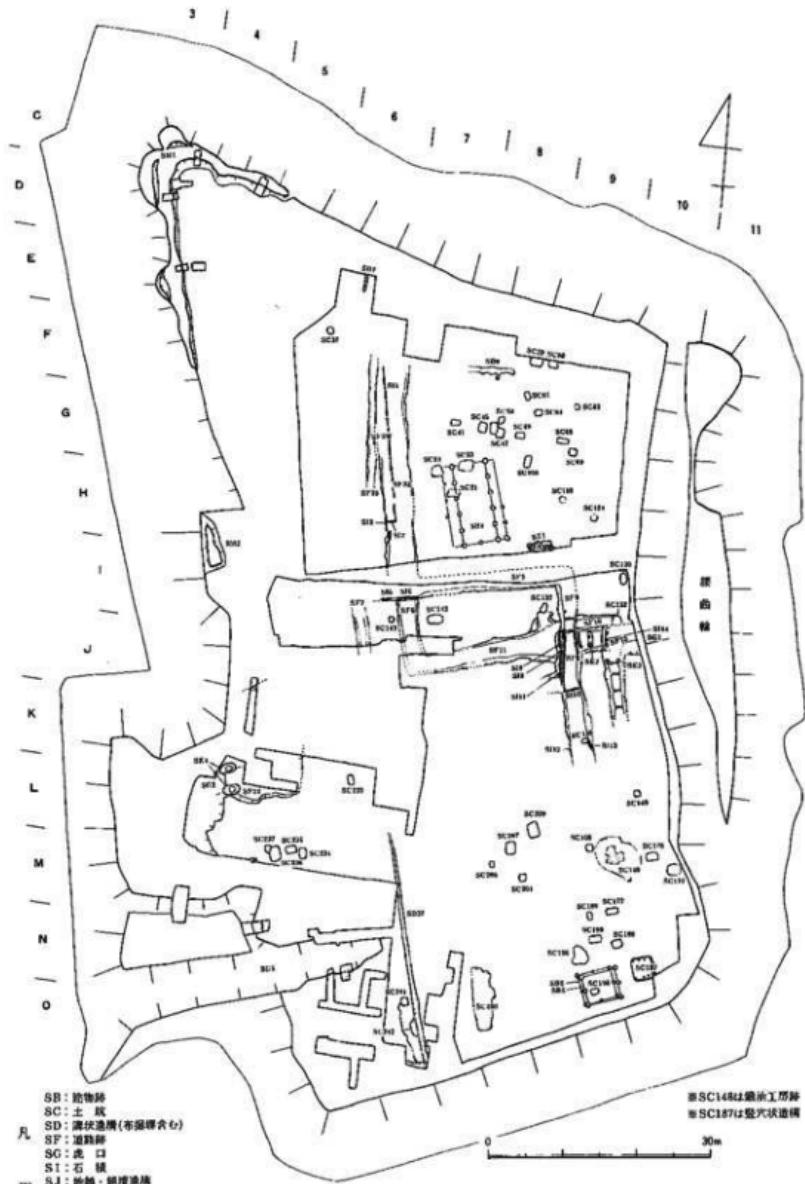
弥生時代の竪穴住居跡は曲輪の南端部（M・N-11区）で1基が検出されたものの、廃土の
処理と斜面の安全対策による制約で、そのほぼ1/4を調査したのみである。平面プランは方
形と推定され、ベッド状遺構を伴っている。（図版6）

さて、大半を占める中世から近世初頭にかけての遺構であるが、その主なものについての詳
細は後述するとして、ここでは道路跡を中心とした大まかな遺構の配置状況と変遷について述
べる。（第2・3図）　なお、ここに使用したI～IVまでの時期区分は遺構の切り合いで
ある相対的な新旧関係と土師器（かわらけ）の編年をはじめとした出土遺物の年代を勘案して設定
したものであり、その実年代はおよそ14世紀後半から17世紀前半の間に納まるものと考え
ている。

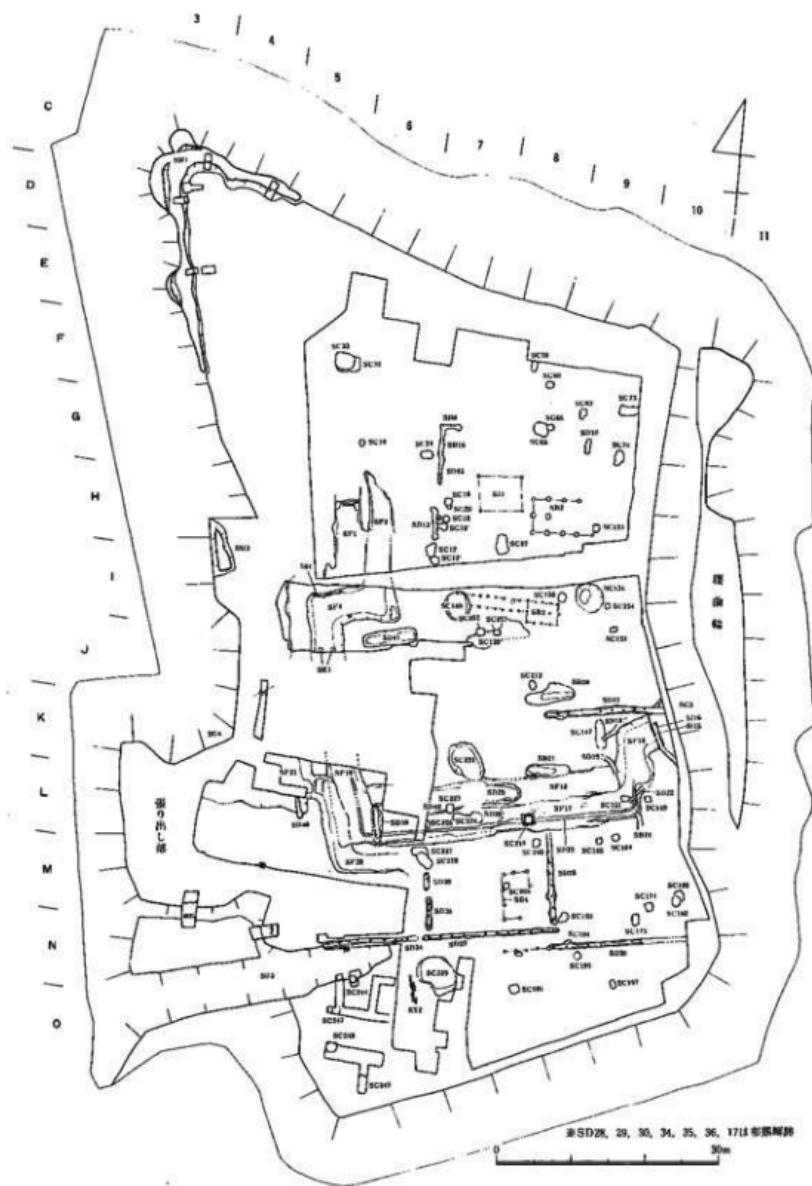
I期は曲輪の東側に虎口（SG 1）が設けられる。そこから「L」字形に堀状の道路が取り付
けられる。（SF 3 W・6・10・11）この時期の後半に、その道路は埋め立てられ、II期にかけ
て入り口部分が「T」字路となって、南北両方向へ抜ける一連の道路が取り付けられる。

（SF 8・12）一方、曲輪の西側にも虎口（SG 2）がつけられている。なお、I期からII
期にかけての主要建物は曲輪の北側に配置されていたようである。（SB 1）また、曲輪の
南端に建物（SB 5・6）や竪穴状遺構（SC 187）などがあり、II期には鍛冶工房と推定さ
れる施設（SC 148）が設けられていた。III期は曲輪東側の虎口の位置が変わり、（SG 3）

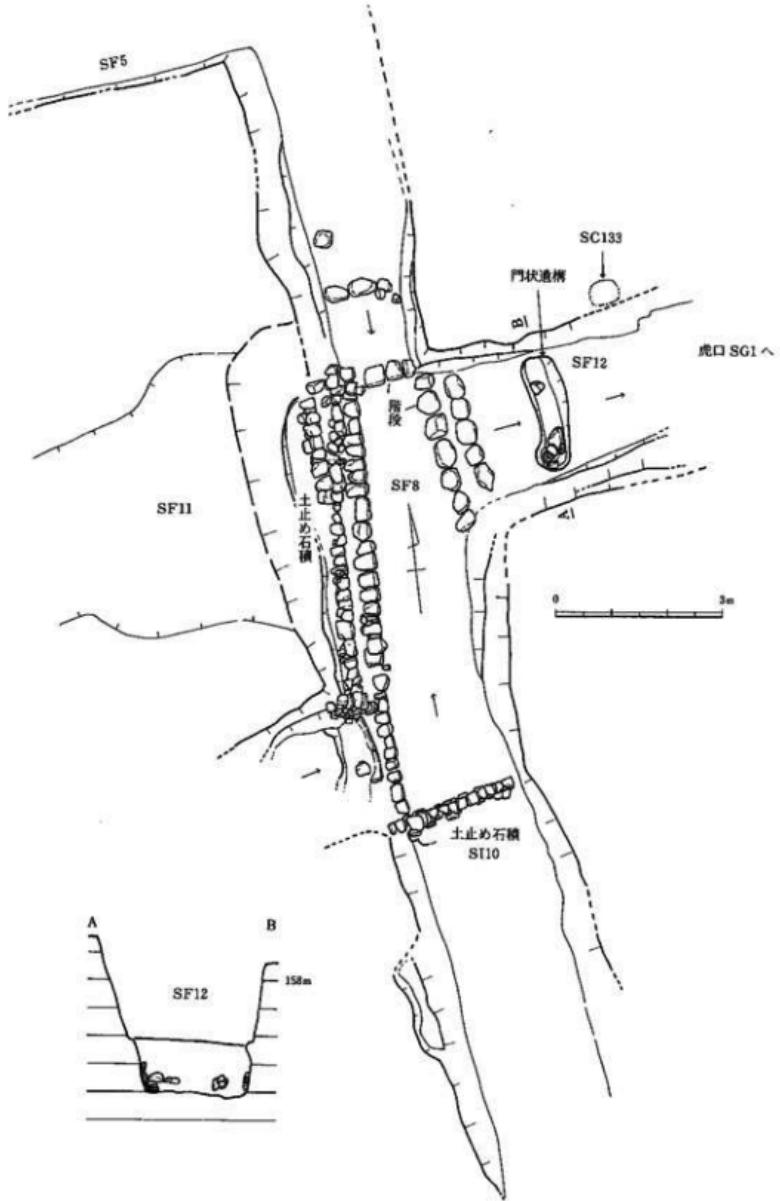
道路にはSF 4やSF 16に見られる桥形がつくりだされる。また、主郭部の西側に隣接する
曲輪（「西城」）との連絡のためと思われる橋梁状の張り出しが設けられ、この時期の後半に



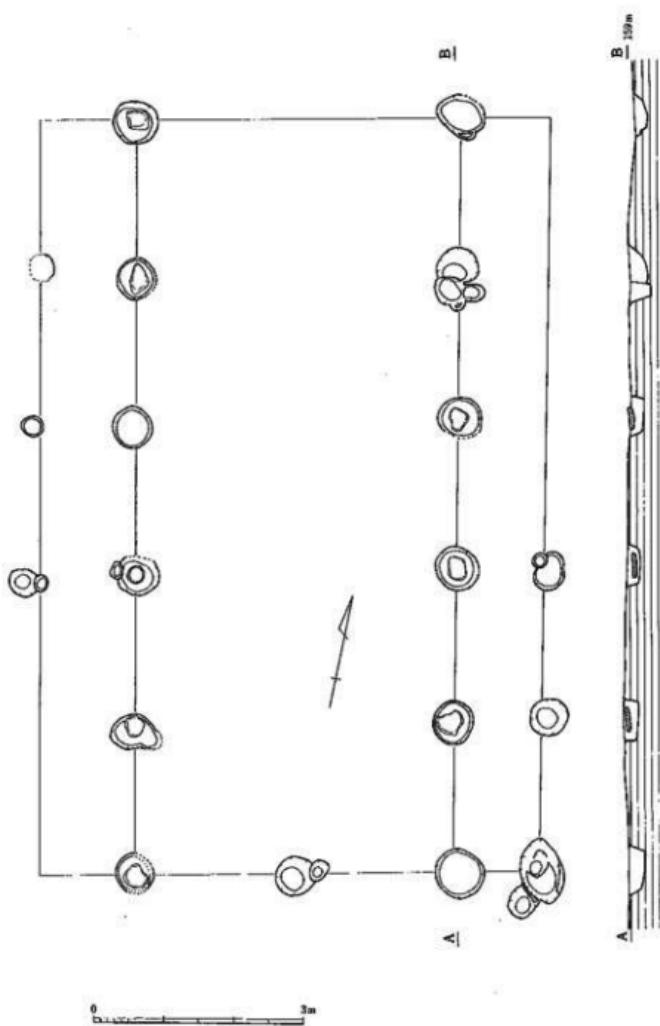
第2図 都之城主郭部主要造構配置図(I ~ II期：14世紀後半～15世紀代)



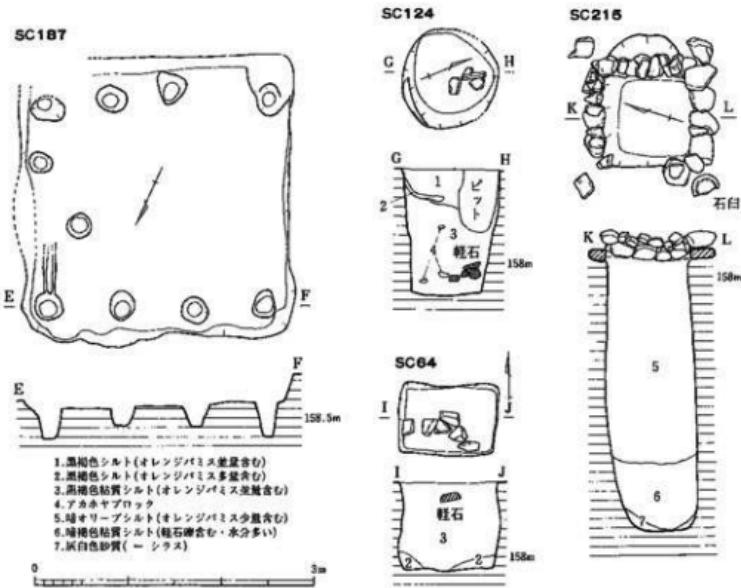
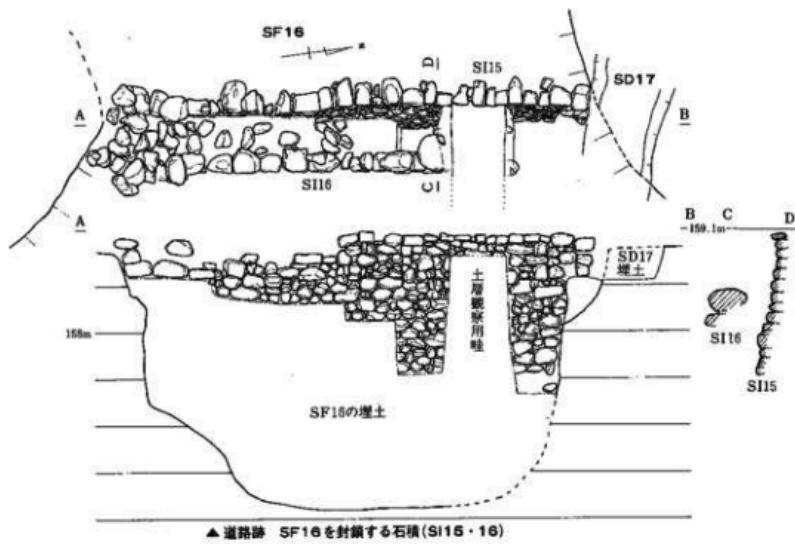
第3図 都之城主郭部主要造構配置図(III~IV期：16世紀~17世紀前半)



第4図 道路跡 SF5・8・12 実測図



第5図 建物跡 SB1 実測図



第6図 各種遺構実測図

は S F 16 が埋め立てられる。なお、主要建物は曲輪の北部にある。(S B 2)

一方、曲輪の南半部に長椿円形、長方形の溝状遺構があり、その埋土中からは、るっぽや鉛滓などの金属加工関連遺物の出土がみられる。IV期の後半には曲輪の東側の虎口(S G 3)は完全に閉鎖され、曲輪内の区画には堀(布掘り工法)が設けられる。曲輪の北部に地鎮・鎮壇の墨書き器が埋納された(S J 1)のもこの時期と推定される。なお、ここでIV期に含めた建物 S B 3 と土坑 S C 139 は出土遺物から近世に所属する可能性がある。

〈道路跡〉(第4図 図版2)

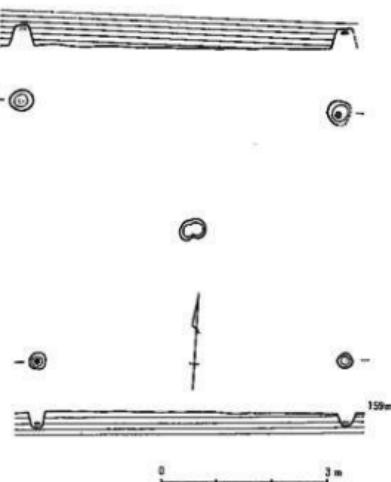
曲輪の中を東西あるいは南北方向に走行するものがみつかっている。いずれも地面を溝状に掘り下げ、その底を路面にするもので、その幅は約2mのものから約5mのものまである。路面はつきかためられたようにかたくしまっており、数cmの硬化層をなす。番号については1号から21号まであるが、これは各調査年次ごとの遺物取り上げの際に便宜的に付したものである。したがって、その内のいくつかは一連の道路としてとらえられる。前節で述べたように道路は虎口の変遷とともに路線変更されているが、その際、旧道路は埋め立てられて新道路が掘られており、新道の法面に旧道の埋め立て土が露頭しているところには軽石や円礫を利用した土止めの石積が行われている。(S I 1・2・3・5・6・8・9・14)
S F 3 E と S F 8 (第4図) はいずれも西側の側壁に前者が約20mにわたって、後者が約6mにわたって軽石を主体とする石積が施されている。また、路面にシラスや礫を敷いて補強した道路もみられる他、虎口に当る道路には偏平な礫を敷いて階段を設けているものもある(S F 8)。

〈建物跡〉(第5図 図版4)

おびただしい数の柱穴が検出されたものの、確実に建物としてとらえられたのは、6棟のみにとどまった。S B 1 (第5図) は南北5間、東西4間の南北棟の建物で、東西両面に扉をもつ。柱間は梁行桁行ともに2.2~2.3mで、柱掘形は径約60cmの略円形である。身舎の柱穴は13個中7個に25~30cm程度の偏平な礫の礎板がみられた。S B 2 は東西4間、南北2間の東西棟の建物で、桁行の柱間は2~2.1m、梁行の柱間は2.2~2.3mである。柱掘形は径約40~70cmの略円形で、柱穴11個中8個に立方体に加工された軽石製の礎板が検出された。

曲輪南東端のS B 5 と S B 6 は時期差が認められるものの、ほぼ同一規模で、プランも似通っている。

〈土坑〉(第6図 図版5)



第7図 地鎮・鎮壇ピット(SJ1)配置図

平面形態は方形プランのものと円形プランのものとがあり、その数は前者のほうが圧倒的に多い。円形プランのものの規模は、径が約1m、深度が1m数十cm程度でSC18の中からは炭化材とワラ状の有機質を含む粘土塊が多量に出土している。方形プランのものの規模は多様で、深度は0.5mから3m以上のものまで幅が広い。SC156は深度が1m40cmで、床面にギョウカイ岩製のふいごの羽口が検出され、埋土中からは炭化材とワラ状の有機質を含む粘土塊が多量に出土している。SC68やSC172はその深さが4m以上になり、作業員の安全対策上掘り底は確認できなかったものの、井戸の可能性がある。SC195からは、炭化米が検出されている。

〈豊穴遺構〉(第6図)

この種の遺構としてはM-11区に1基のみが検出されている。(SC187) 平面プランは1辺が約3mの正方形を呈しており、南北両壁沿いの床面にピットが4個ずつ検出されている。なお、埋土の上部には多量の拳大の礫が投げ込まれていた。

〈石組土坑〉(第6図 図版5)

SC215は道路S F17が埋め戻された後、K-9区に掘られたものであり、土坑の上部は壁面を補強するために、軽石を中心とした石積みが施されている。また、土坑周囲の四隅に偏平な礫や石臼の欠損品を配置して礫石にしており、上屋があったものと推定される。

〈鍛冶工房跡〉(図版5)

L-10区に4~5mの範囲で不整形の豊穴があり、(SC148) そのほぼ中央部に径約2.5mの粘土、焼土、炭化材が集積していた。なお、豊穴床面には大小の砥石(210, 211)、鉄製品、鉄滓、焼礫、炭化米などが散布しており、壁際の土坑には粘土が堆積していた。

〈堀跡〉(図版5)

S D17・28・29・30・34・35・36の遺構の整理記号は溝状遺構に含めているが、以下に示した状況から布掘り工法の堀跡と推定した。幅は60~70cm、検出面からの深さは50cm程度であり、床面には1.5m間隔で偏平な礫の礫石が置かれている。礫石の部分の土層断面に見られる柱痕跡を観察するとその径は約14cmで、溝の埋土は堅くしまっている。これらは曲輪内の区画のための、一連の堀であろう。なお、M-9・10区の入口部分には2本の堀(S D29・30)を互い違いにした「食い違い」が作られていた。

〈溝状遺構〉

溝状遺構には幅の狭いタイプと稍円形の土坑状のものを一括している。前者にはSD8・15・16のように「L」字形に走行し、屋敷の区割りを目的としたと思われるものと、SD37などのように排水溝的なものの2者がある。ただしSD37には水成作用による堆積層は見られない。

稍円形状のものには先述したように、金属加工関連の遺物が投棄されているものがある。(SD21など)

〈地鎮・鎮壇遺構〉(第7図 図版6)

曲輪の北側に、長辺約5.7m、短辺約4.5mの長方形に配置された4つのピットが検出され、それぞれの中に輪宝墨書き器が1点ずつ埋納されていた。(SJ1) その他に、ピットの中に土師器の壺2枚を蓋と身のように口縁部を重ね合わせて埋納した例や、錢貨が埋納された

ピットなどがあり、これらは建物を建築する際の地鎮・鎮壇によるものと考えられる。

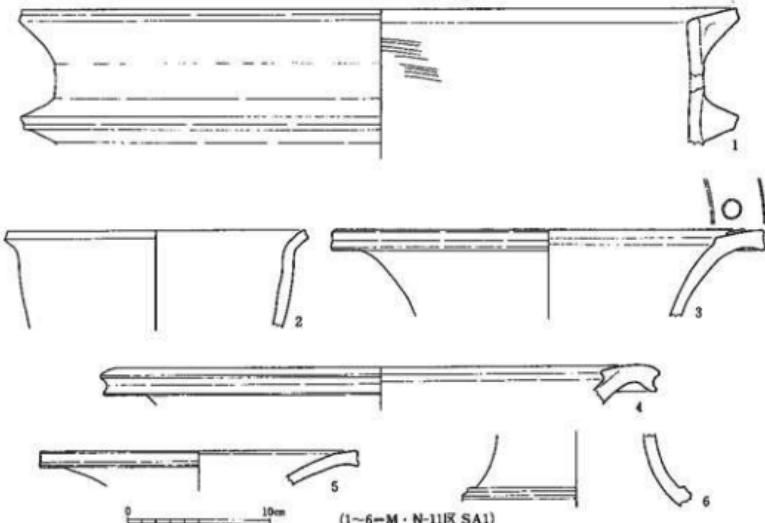
(2) 遺物

城郭以前の遺物としては、縄文時代の土器・石器や弥生時代の土器などがある。前者はいずれも中世の遺構中に混入している。それらの型式には石坂式(224)や塞ノ神式が見られ、本来はアカホヤ火山灰層より下位に出土する遺物であるが、城郭造成時に、もちあげられ2次堆積したものと思われる。弥生時代の遺物は先述した竪穴住居跡(SA1)や中世の遺構から出土している。1~6はSA1から出土した一括資料である。(第8図) 1は大型の変形土器である。2は小型の変形土器で外面にススが付着している。3~6は壺形土器であり、3は口縁部上面に円形の貼付文がある。1, 6は胎土にウンモを含む。

また、1~5区のピットから出土した瓦絆の破片(222)は周縁が2次的に研磨されており、出土遺構の時期は中世と判断されるものの、製作された年代は平安時代に遡る可能性がある。中世以降の遺物については、以下種類別に述べる。

〈土師器(かわらけ)〉(第9~11図)

今回の発掘調査によって得られた遺物の出土状況には埋納、投棄、2次堆積あるいは流れ込みなどのいくつかのパターンがある。また、遺構の中から見出だされる遺物群はその使用方法、耐用年数の違い、あるいは遺構の性格やその堆積パターンによっても、出土品の製作年代はある程度の幅があるものと見なくてはならない。重ねて本遺跡においてはそれらの実年代を示す紀年銘のある遺物の出土も皆無である。



第8図 弥生土器実測図

さて、出土する遺物の大半を占めるのが土師器である。この遺物はその性質から最も新陳代謝の激しい消耗品として位置づけられる。したがって土師器の編年を行なえば、フィードバックして、かなり細かい遺構の前後関係や併行関係を検証することが可能である。

そこで、遺構内に完形に近い土師器がかなりまとめて出土する場合、これらを同一時期の所産と認め、それらをセットと認定する。さらに、遺構間の切り合いによる前後関係を見、そのほかの伴出遺物(陶磁器など)の下限の年代を照合した上で、ⅠからⅣまでの4段階を設定した。

ちなみに、底部の切り離し技法はすべて回転糸切り離しである。用途については供膳具以外に、燈明皿やるつぼとして使用されていたものもある。なお、今回図示したものは完形に近いものを中心になるべく口径・底径の正確に把握できるものを抽出している。

Ⅰ期…溝 S D 7、道路 S F 11、土坑 S C 209・186出土の土器を標式としてあげている。坏に見られる特徴として、体部外面のロクロ調整痕を明瞭に残す点や底部の切り離しの際、交差する糸同志にズレが生じ、底部片側に張り出しが見られる点、使用する糸にはワラなどをよって繩状にした比較的粗いものが用いられている点などがあげられる。(20) また、小皿は口径・底径のわりに器高の低く浅いタイプのものである。

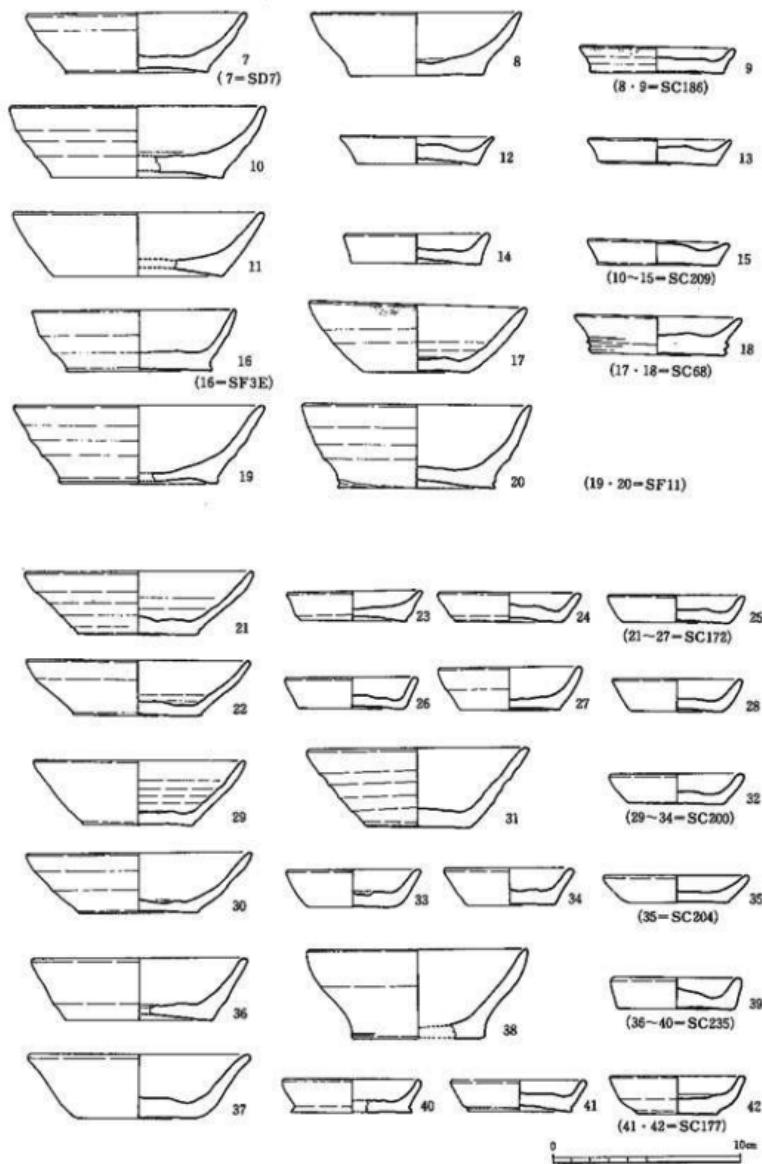
この段階は土師器の坏、小皿の2者の別が明瞭であり、器種のバリエーションも限られている。年代は14世紀後半から15世紀初頭を当てている。

Ⅱ期…土坑 S C 59・172・200・235出土土器を標式としている。坏の特徴は底径のわりに口径の大きい、体部の極端に開く形態のものがあり、ロクロナデによる調整痕を明瞭に残すものと丁寧にナデ消すものがあるが、いずれも概して器壁は薄い。小皿にはⅠ期に見られた浅いタイプのもの(23~25)と、口径・底径がひとまわり小さくなり、器高の高くなるもの(27, 33, 34)の2者が認められる。これらの土師器の出土遺構からは口縁部断面形が三角形を呈する備前焼の擂鉢(16)が出土しており、土師器との耐用年数に若干の食い違いはあると思われるが、およそ15世紀代とておく。

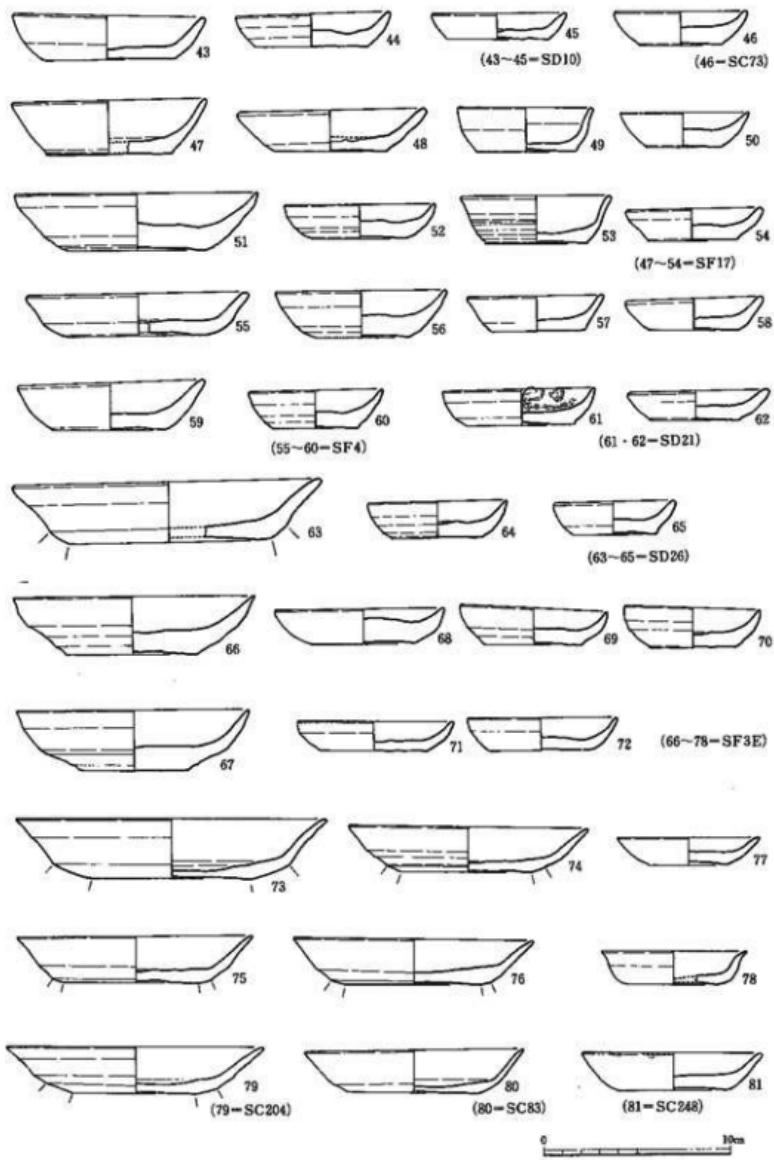
Ⅲ期…溝 S D 10、道路 S F 3 E 上層、道路 S F 17上層出土の土器を標式とする。左記以外に遺構内で一括で出土する例が少なく、前段階との型式的な脈絡のなさや次の段階との時期的な重なりが認められるものもあり、一時期と認定するのは困難である。今後再編成する必要があろう。

坏には体部が丸く立ち上がり、口唇部先端が尖るものが見られる。(66, 67) また、底部を切り離した後、底面の周縁部をヘラで削り、底面に板状の圧痕のある薄手造りの特徴的な整形法の見られる一群があり、それらの法量は比較的大きい。(73~76, 79) 中には2次加熱を受け赤橙色に変色したものもみられる。この時期以降、土師器の法量と器種のバリエーションが著しく多様化する。伴出した陶磁器などにより、16世紀代と考えている。

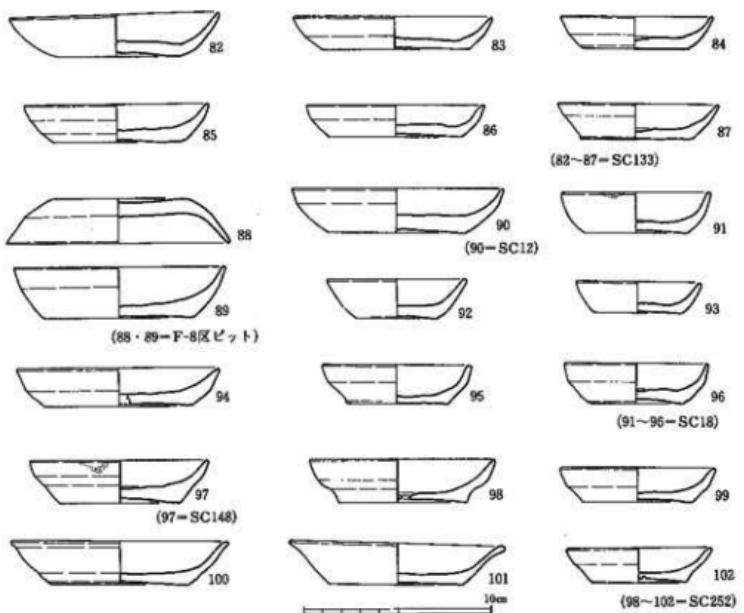
Ⅳ期…この時期の一括資料としては、土坑 S C 18・133・252出土土器がある。しかし、年代が具体的に示す伴出遺物が比較的少ない。坏や小皿の形態的な特徴としては体部が屈折する点があげられる。88と89の2点の坏はⅣ層(桜島文明降下軽石)を掘り込んだビット内に蓋と身のように口縁部どうしを合わせた状態で埋納されていた。また、103は地鎮・鎮壇ビット内(S J 1)に埋納されていた土器である。内面に墨書きで輪宝を描きその中央(見込み)に梵字を書



第9図 土師器(かわらけ)実測図〈1〉上段I期・下段II期



第10図 土師器(かわらけ)実測図 <2> Ⅲ期

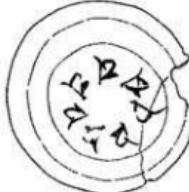
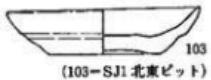


第11図 土器(かわらけ)実測図<3> M期

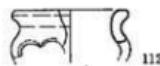
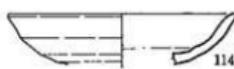
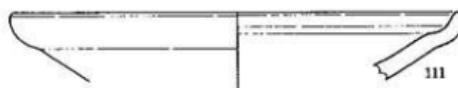
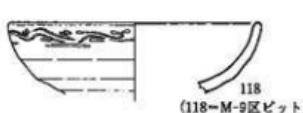
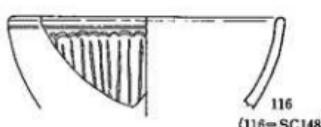
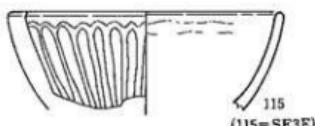
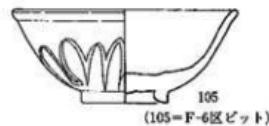
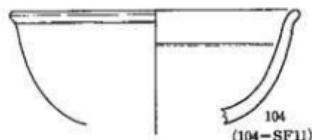
き入れ、底面にも7つの梵字を書き入れたもので、同タイプのものが4つのピットから1点ずつ合計4点出土している。98は底部に焼成後穿孔が施されている。100, 101は98, 99と土坑SC252内で共伴しているが、前2者は赤褐色を呈し、非常に硬質であり、他の土器とは著しく異なっている。点数もこの遺構から出土したものに限られることから、他地域からの搬入の可能性がある。この段階の年代についてはSC252で伴出した染付から、とりあえず16世紀末から17世紀前半に位置付けておく。

《青磁》(第12・13図)

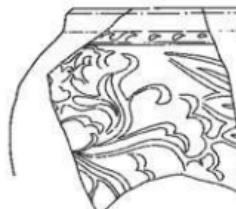
104~118は碗である。104~108は口縁端部が若干外反する。104は内面と外面にそれぞれ一本ずつ沈線がある。106は口縁部が玉縁状になり、釉はやや黄色味がある。107は外面とともに釉が厚くかかる。109は体部が直線的に外傾し、ロクロによる調整痕を明瞭に残す粗製碗である。110は高台疊付部および高台内面は無釉である。105は片切形によって蓮弁文を作り出している。内面見込は無釉である。高台内も無釉で、



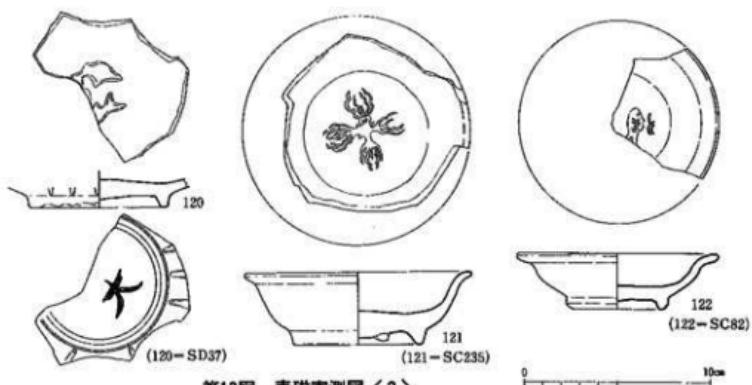
▲ 精宝器蓋土器



(106~114=SC200)



第12図 青磁実測図(1)



第13図 青磁実測図〈2〉

施道具痕が見られる。115は丸彫によって表現された蓮弁文をもつ、116と117はヘラ先による細い蓮弁文が描かれる。118は口縁部に波頭状の文様が施される。104～110は14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられる。

111は口縁端部を上方に引き上げる盤で、釉は黄色味を帯びる。113と114は皿で両者とも2次加熱を受けている。112はすかしのある香炉で、釉は深緑色を呈し、厚くかかる。119はいわゆる酒海壺である。口唇部は無釉で、他にセットとなる蓋も見つかっている。120～122は皿で120と122はいずれも内面見込に前者は浮文の後者はスタンプによる双魚文が見られる。121は見込に羯摩文のスタンプが施される。なお120は高台内に墨書で「大」の字が記入されている。

〈白磁〉(第14図)

123、124はいわゆる「口禿げの白磁」で、14～15世紀である。125、126は体部が丸味を帯び、口縁部で若干外反するもので、126は胴部下半から高台にかけて露胎となる。125は釉がやや青味がある。126は灰白色を呈し、見込に壓押しの花文が見られる。127、128は皿、129～131は小杯でいずれも高台以下は露胎となる。132は端反りの皿で、高台疊付部のみ釉を拭き取っている。133は灰白色の釉が薄くかかり、高台以下は露胎となる。青磁の118や染付の140とピット内で共伴していた。134は菊花形の皿で、釉はやや青味がある。それぞれの年代については、125、126が14世紀後半、128～131が15世紀代、132、133が15世紀末から16世紀前半、134が16世紀代であろう。

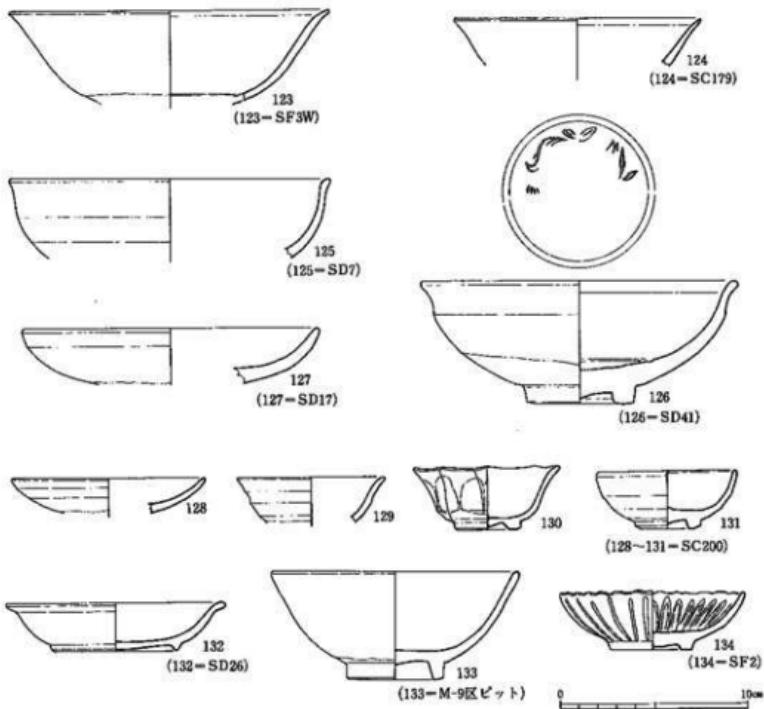
〈染付〉(第15・16図)

135は端反りの碗で、外面には唐草文が見られる。136はいわゆる「レンツー碗」である。見込に荒磯文、外面に芭蕉葉文が見られ、高台内に「大明嘉靖年製」の銘がある。137は外面にアラベスク風の文様が、見込に法螺貝が描かれる。高台先端のみ無釉である。138はいわゆる「マントー心」の碗で高台内に字款を書く。139は口縁部から腰部にかけて丸みを帯びて高台にいたるもので、胴部に大柄な花文が描かれる。140は見込に呉須で「正」の字が書かれる。高台とその内面は無釉である。141は端反りの皿で、外面に唐草文、見込みに十字花文が描かれる。142と143はいわゆる基筒底で、142は口縁外面に波頭文、胴部外面に芭蕉葉文、見込に植物が

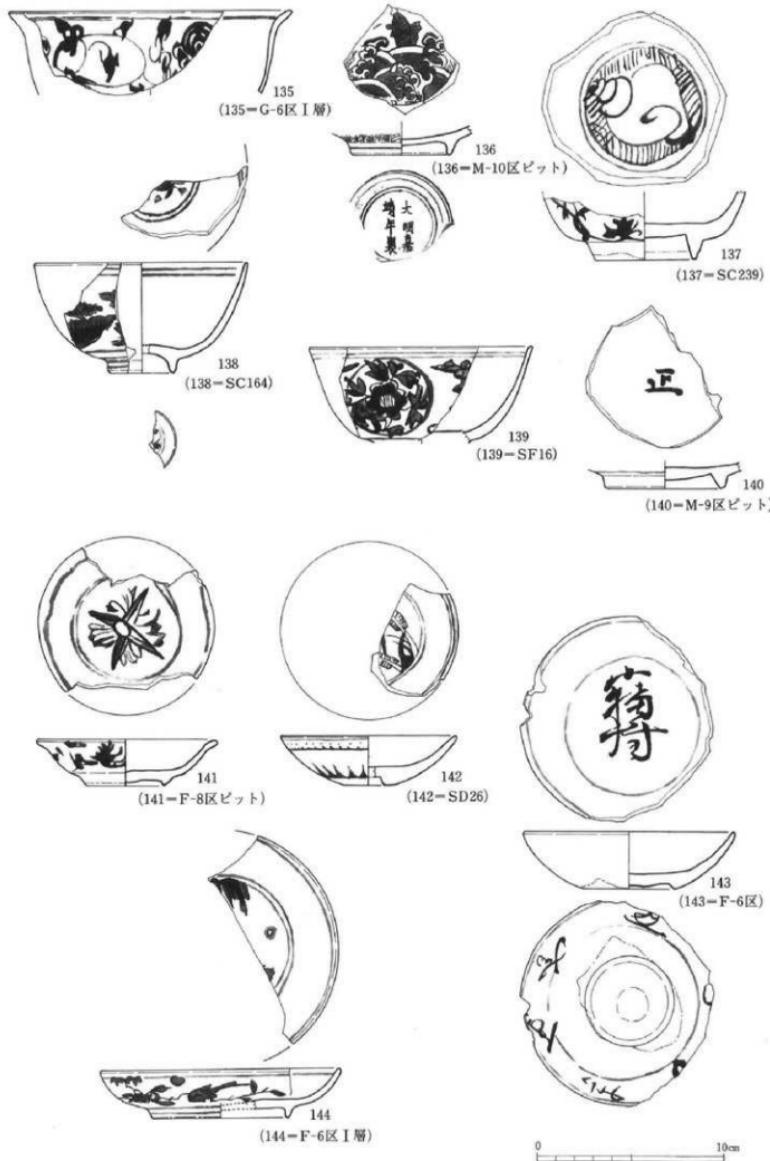
描かれる。143は外面に文字と思われる記号が、6つ書かれ、見込に吉祥文が描かれる。144は、体部が丸く立ち上がり、脇部外面に花鳥折枝、見込に山水人物が描かれているものと思われる。136、138は高台疊付のみ、釉を削りとっている。146は蓋である。天井部に魚が描かれる。口唇部と口縁部内面は無釉である。145、147、148は皿で、丸みを帯びる脇部から口縁部にかけて屈折し、大きく開く形態を呈する。145は、高台疊付と高台内面が無釉で、貫入が著しい。147、148はいわゆる呉須手である。釉は乳白色を呈し、厚くかかる。148は全面に釉がかけられ、高台疊付から内面にかけ砂目が見られる。福建ないし廣東系の窯で焼かれたものと推察される。

〈その他の磁器〉(第17図)

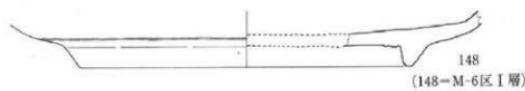
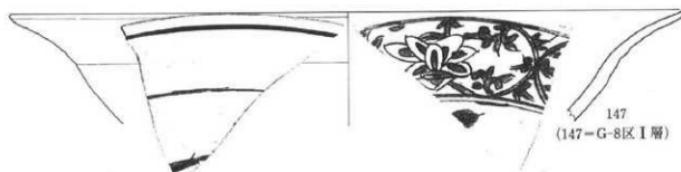
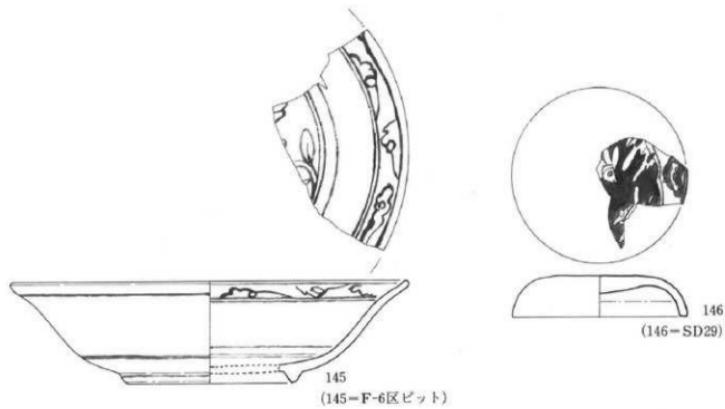
149～152は外面にり色の釉が、内面に透明釉がかかる臺である。脇部に龍が陽刻され、その部分には釉はかけられていない。他に同一個体と思われる十数点の破片が出土しているが、それらの中にはセットとなる蓋の一部と思われる破片も含まれてゐる。153～155はいわゆる赤絵である。153は花文の一部に緑色の釉が用いられる。また、154と155は界線のみが呉須で描かれている。いずれも明代の製作であろう。



第14図 白磁実測図

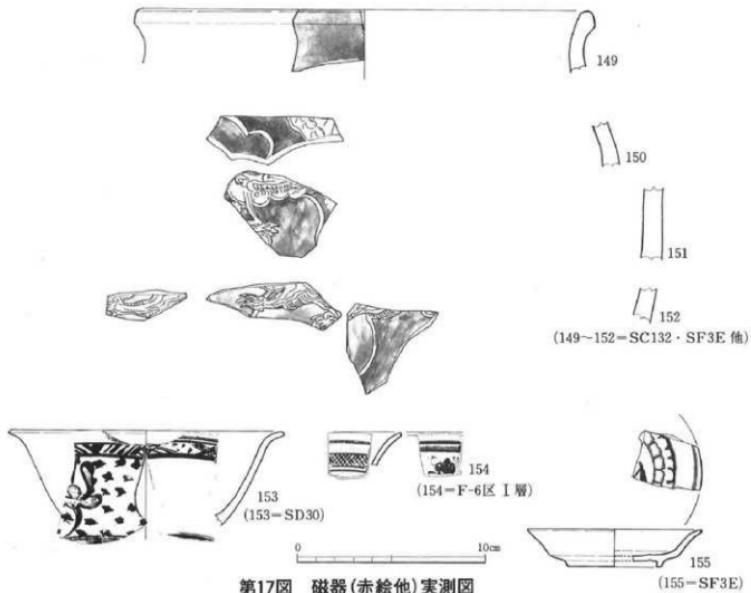


第15図 染付実測図 <1>



0 10cm

第16図 染付実測図 <2>



第17図 磁器(赤絵他)実測図

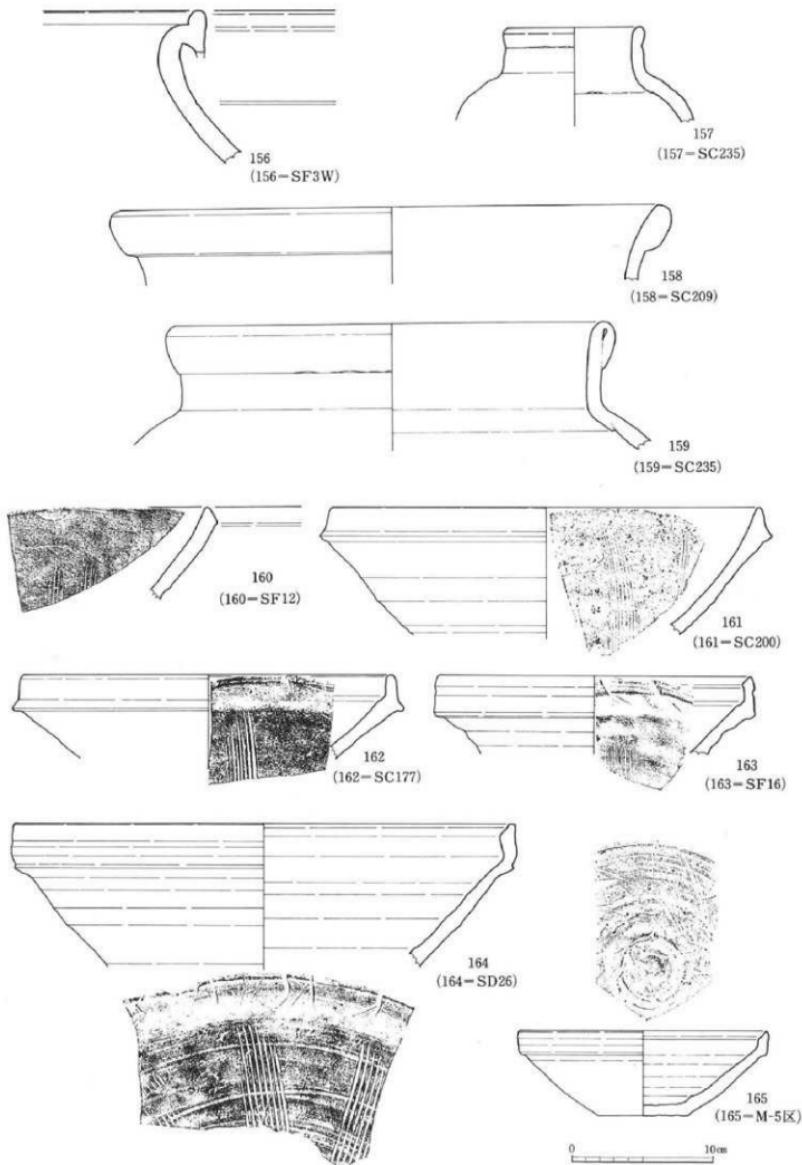
〈陶器〉(第18・19図)

156は常滑焼の壺である。157～165は備前焼であり、158と159は壺、157は壺、160～165は擂鉢である。156と158は14世紀後半、157は15世紀代、159、160は15世紀前半、161は15世紀中頃、162は15世紀後半、163は16世紀中頃、164、165は16世紀後半であろう。小型でスリ目が細かい165は茶道具と推定される。

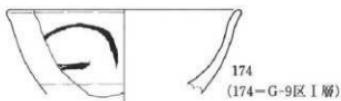
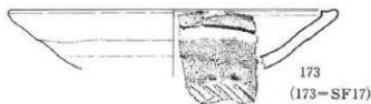
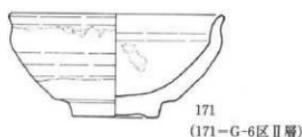
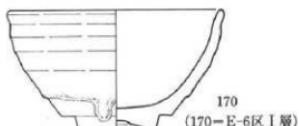
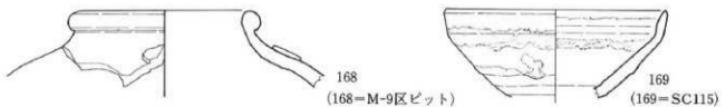
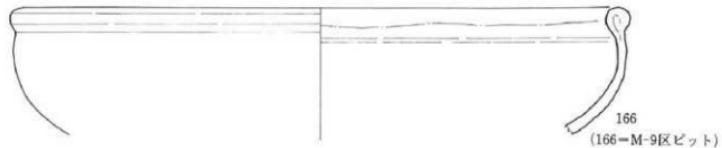
166～169は船載品と思われる。166はいわゆる「洗」と呼ばれる形態に属し、外面に褐色の鉄釉が、内面に緑色の灰釉がかかる。胎は灰色を呈し、硬質である。167と168は、いわゆる褐釉の壺で、いずれも口縁部内面に鉄泥漿が塗布される。168は肩部に耳をもつ。169～171はいわゆる天目茶碗である。169の外面は胴部下半まで赤褐色の釉がかかり、さらにその上に黒色・暗褐色・ぶい橙色の釉がかかる。胎は灰色で、非常に硬質である。170は暗褐色、171は褐色の釉が厚くかかり、胎は灰白色でやや軟質である。いずれも瀬戸・美濃系と思われる。172と173は瀬戸焼である。172は皿で、内外面に透明釉が薄くかかる。胎は白灰色である。173はおろし皿で、口縁部に緑色の釉が厚くかかる。174と175は唐津焼である。174は鉄絵の描かれた碗である。175は口縁部を縁なぶりによって波形にした皿で、見込に重ね焼きの目跡が残る。いずれも17世紀初頭の製品である。

〈瓦質土器〉(第20図)

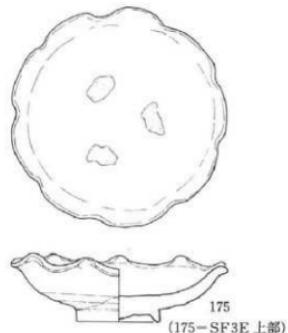
176～178は火鉢である。176は菊花文、177は雷文が印刻される。178は口縁部に凹線がめぐり、内縁に刻みを入れた管状工具による印刻文が施される。176と177の内面は赤褐色に変色してい



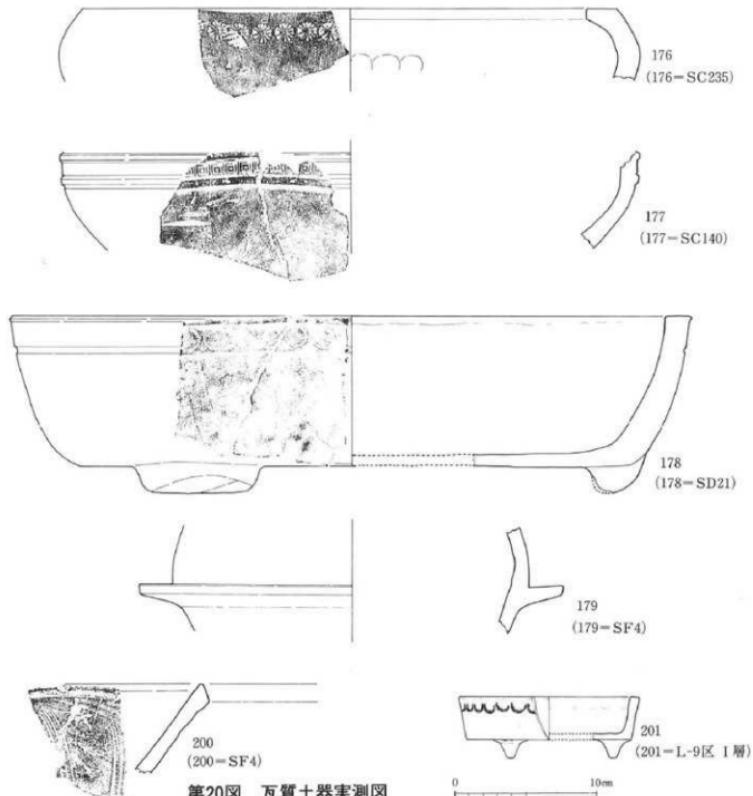
第18図 陶器実測図 <1>



0 10cm



第19図 陶器実測図〈2〉



第20図 瓦質土器実測図

る。179は羽釜である。内外ともに灰色を呈し、外面は鉢以下にススの付着がみられる。200は擂鉢である。内面に粗いスリ目が曲線的に施され、口縁内面にわずかな段をもつ。201は三足の香炉である。口縁部に178と同じような工具を用いた印刻が施される。

〈瓦〉(第21図)

202は布掘り溝 S D 30の柱痕跡内に倒立した状態で検出された「五七桐文」の軒丸瓦である。灰色を呈し、外面に斜格子状の叩き目が、内面に布目痕が見られる。他に包含層から多数の同種の文様の瓦片が見つかっている。203～205は軒平瓦の破片である。いずれも唐草文であり、灰白～灰色を呈する。

〈石製品〉(第22・24図)

石臼は数点の出土を見ているがいずれも欠損品である。206は砂岩質の茶臼の上臼である。上面の対象物を入れる凹面は水平でない。引き手を差し込む穴の周囲は方形の凸部が作り出されている。軽石を利用した製品としては、箱状の容器や支脚(208)と思われるものなどがある。

後者は土坑 S C 172, 186などから見つかっている。218と219は硯である。

〈金属加工関連遺物〉(第23図)

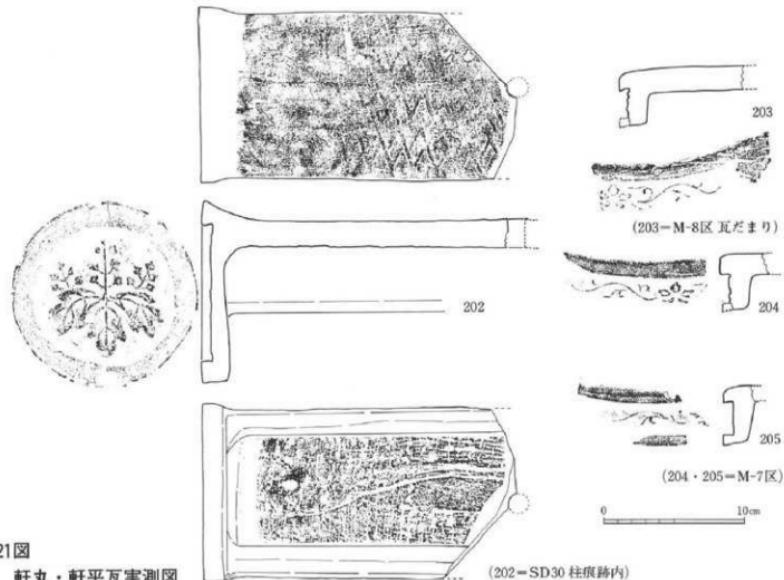
ふいごの羽口には直径10cm以上のものと約5cm程度のものの2者が認められる。またその素材も粘土の他に大型製品にはギョウカイ岩が用いられている例がある。209は通気孔の径が約3cmの粘土製で、先端には赤褐色や青緑色の鉱滓が溶着している。210と211は磁石である。212と213は銅やその他の金属との合金鋳造に伴うるつぼである。その他に土師器を転用したるつぼも少くない。(61)

〈金属製品〉(第23図)

釘、調度金具、錢貨(「洪武通宝」、「永樂通宝」、「朝鮮通宝」)などが出土している。武器の出土点数は少ない。武器には鉄製のやりや短刀(214)の他に直径1.1cm、重さ10.1gの弾丸が1点見つかっている。

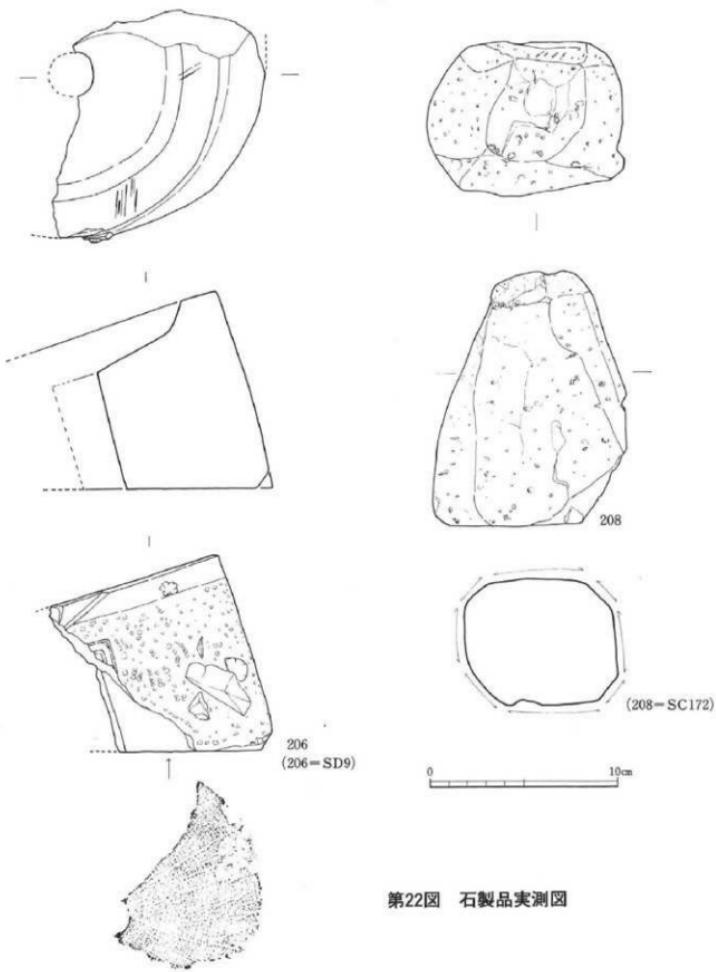
〈その他の遺物〉(第24図)

215は唐物の茶入れと推定される。暗褐色の釉がかかる。216は土師器で、いわゆる耳皿である。217は土師器の蓋である。天井部にツマミがついているものと思われる。220は焼塩壺の胴部にあたり、内面に布目痕を見る。赤褐色を呈し、非常に脆い。221は土錘である。漆製品は断片的に見出だされているものの、そのほとんどの木質部が完全に腐蝕しており、全形を明らかにできるものは少ない。223は漆椀と思われる。やはり木質部は腐蝕している。土坑 S C 172に廃棄されており、同遺構内からは他にもう1個体出土している。



第21図

軒丸・軒平瓦実測図

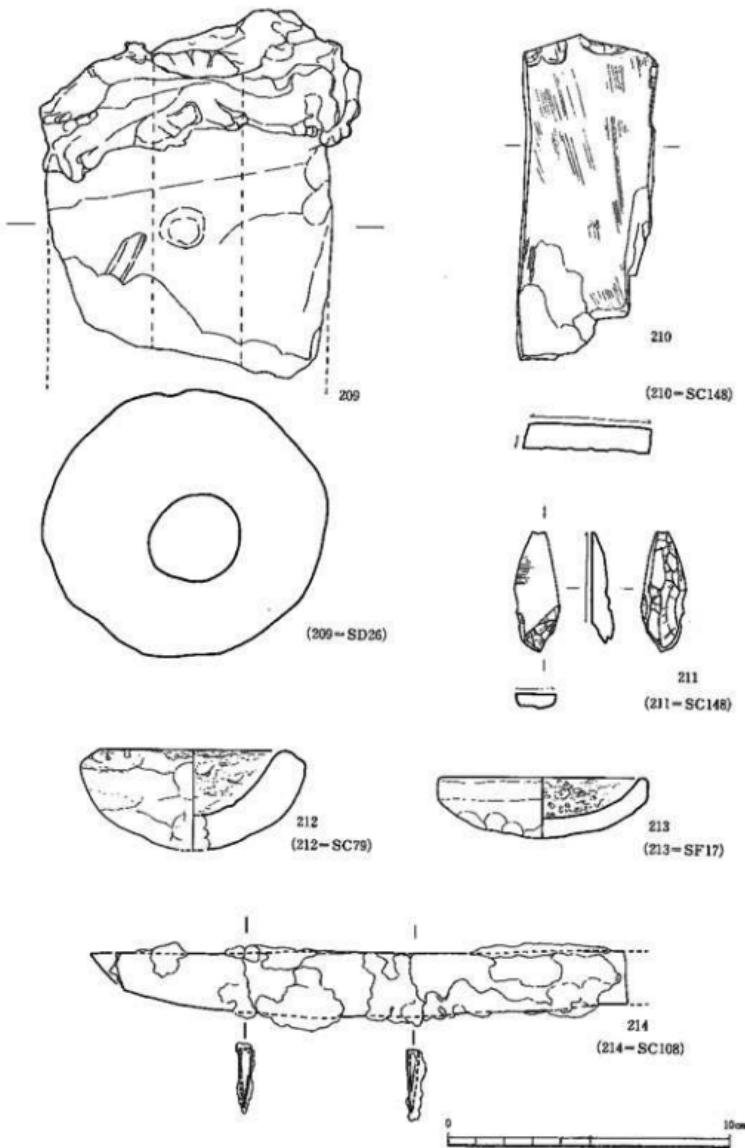


第22図 石製品実測図

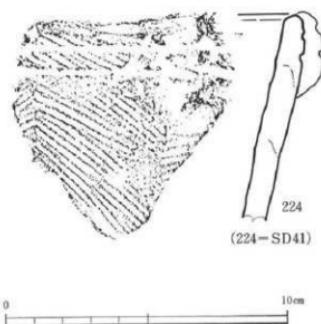
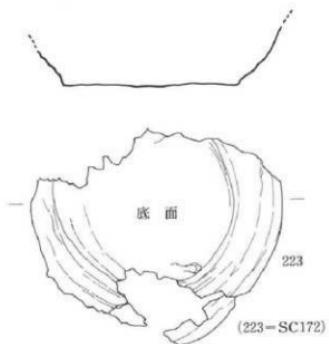
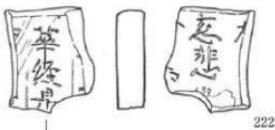
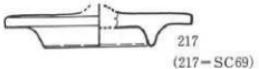
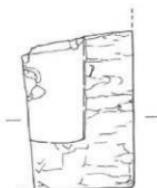
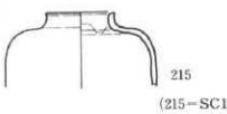
5.まとめ

4次にわたる調査は主郭部平坦面の約60%を網羅し、得られた成果は少なくない。以下にそれらを列記し、問題点をあげ、正式報告への課題としたい。

第2、3次調査では、この台地が中世城郭期以前の縄文時代早期と弥生時代中期にも利用されていたことが明らかとなった。また、第4次調査で見つかった瓦経破片は平安時代にこの地が特別な場所として認識されていた可能性を示している。



第23図 金属加工関連遺物および鉄製品実測図



0 10cm

第24図 その他の遺物実測図

中世城郭期の遺構は既に述べてきたように、著しく重なり合っており、それらの時期判別は困難を極めた。

堀状の道路は城の防衛上重要な位置を占める虎口の変遷に合せて幾度も路線変更が行われており、路面の維持と法面の土止め石積などは当時の土木技術を知る上で貴重である。さらに、橋形の設けられたものや階段状遺構を伴うものも注目されよう。

建物については確実にとらえられたのは6棟のみにとどまった。主要建物の配置は15世紀、16世紀ともに主郭部の北側が中心であったものと思われる。

数多くの土坑はそれらが城内において欠かせない施設であったことは疑いないものの、その用途を直接的に示す物証はなく、今後の検討課題である。

鍛冶工房と思われる遺構の検出やるつぼ・鐵滓などの出土はこの曲輪内において金属製品の加工・修理を行っていたことを示している。

九州内で初出となった輸宝墨書き土器の埋納されていた地鎮・鎮壇遺構は城における祭儀や宗教的背景を知る上で貴重である。

16世紀末に位置づけた布堀り工法の跡は、その周辺出土の瓦とともに近世城郭を想起させるものである。特に軒丸瓦の「五七桐」紋は当時の政治的背景を物語るのに十分であろう。

出土土師器はあまりにも多量で、今回図示したものもそれらの全てを網羅したわけではなく、今後整理・検討し、細かな編成を行っていく必要がある。

出土陶磁器は舶載・国産と多様であり、それらの流通ルートには興味深いものがある。また、中には戦国大名クラスの所蔵品と言っても過言ではない高級品が認められ、城主の経済力の大きさを推しはかることができる。

目下、約4千点にのぼる出土品の整理中であり、今後、すでに調査されている「中之城」「取添」の曲輪の調査結果とも比較・対照しながら、本曲輪の全体縄張りの中での位置づけと役割を遺構・遺物から明らかにしていきたい。

(柴畠光博)

〔参考文献〕

- ・『山田聖栄稿』（都城島津家史料）
- ・『有田将監記』（　　＊　　）
- ・『当家御旧例覚』（　　＊　　）
- ・『都城・中之城跡』（都城市文化財調査報告書第3集）都城市教育委員会 1983
- ・森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」 同上
- ・小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 同上
- ・大槻康二「15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案(1)」『白水』No8 白水会1981
- ・岡壁忠彦『鎌前焼』（考古学ライブラリー60）ニューサイエンス社 1991
- ・『古代研究』28・29 特集 地鎮・鎮壇 元興寺文化財研究所 1984

図版1



第1次調査・空中写真(東から)



第3次調査・空中写真(東から)



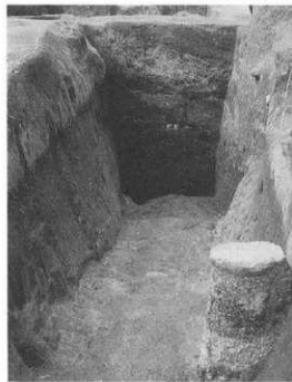
第3次調査・造構全景(南から)



▲道路跡SF8「T」字路部分(東から)
▼同上階段



道路跡SF12門状遺構(東から)▶



▲道路跡SF15(南から)



▲道路跡SF4枠形部分(南から)

図版3



▲道路跡SF3E西側法面の石積SI1(東から)



▲道路跡SF4北側法面の石積SI4(南から)



▲道路跡SF8西側法面の石積SI8・9(東から)



▲道路跡SF8を封鎖する石積SI10(北から)



◀道路跡SF16を封鎖する石積SI15・16



▲建物跡SB1(南から)



▲建物跡SB2(西から)



▲建物跡SB5・6(西から)

図版5



▲ 石組土坑SC215(西から)



▲ 鋳治工房跡SC148(北から)



▲ 土坑SC156

※床面にふいごの羽口が見られる。

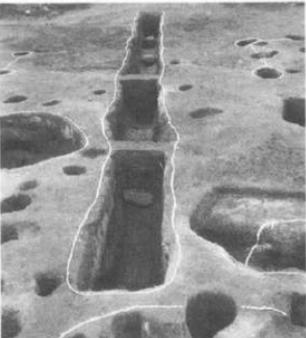


▲ 土坑SC198



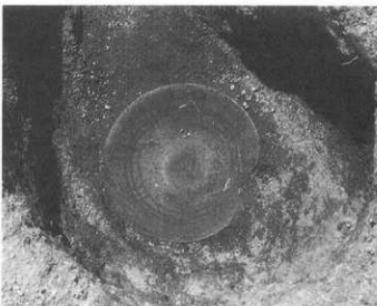
▲ 布掘跡SD29・30「食い違い」部分(西から)

布掘跡SD29(東から)▶





▲ 土坑SC133内土器群検出状況



▲ 地錫・鎌壇遺構SJ1・北東ピット土器埋納状況



◀ 硬石状(あるいは手水鉢状) 破片検出状況



▲ F-8区 ピット内・土器埋納状況



◀ 道路跡SF4内
硬石状石製品
検出状況



▲ 建物跡SB3 ピット列(東から)



▲ 新石器時代・竪穴住居跡SA1(北から)

〈付 論〉

都之城について

繩張検討による現状把握

八 卷 孝 夫

1. 都之城の占地

都之城は宮崎県の南部の大動脈大淀川に面した台地を要害として築城している。現在の大淀川は、やや城より離れているが、築城時は、本丸の直下を流れていたと考えられる。築城の目的は、都城盆地の領内把握と交通の大動脈の大淀川の確保であったろう。

当初の築城は、大淀川に面する半月状の台地（本丸・西城・中之城・外城・小城のある台地）が自然の谷とつながっている部分（西城と池之上城の間）を、人工の堀によって切り離し、独立させたものである。そして、なおもこの台地をいくつかの堀によって分割し、曲輪を造成したのである。（曲輪名はとりあえず、後述の都城古絵図に従う。）

その後、勢力の拡大に伴い、台地続きの池之上城・新城・中尾城などを取り込み、それぞれ堀によって分割し、防御を固めた。

取添は、最終的な時点で、屋敷地の確保のために取り入れたものであるが、城に面した台地縁をL字形に確保した意図の中には、防御の意識もあると思われる。

以上のように都之城は地勢によっていくつかのグループに分けられるが、それは築城と曲輪の増設の伝承とほぼ一致している。これは都之城の拡充が、地形をうまく利用してなされていったことを表している。

都之城の曲輪のグループは、本丸・西城・中之城・外城・小城の「川沿いの台地グループ」、池之上城・中尾城・中尾之城の「台地続きグループ」、そして取添の「台地縁グループ」の三つである。「川沿い台地グループ」が、この城の中核グループであり、当初の築城のものであろう。伝承では永和元年（1375）の築城といわれるが、もちろんこの年に全てができるわけではなく、居館が本丸台地上にできただけの可能性もある。なお小城は第二期の造成によるものとされているが、地形的には「川沿いのグループ」に含まれているので、当初から築城されていたかもしれない。

「台地続きグループ」は、中核部のみでは手狭になったためと、中核グループを包むような形の台地（新城など）を残しておくのが不安になったため、そこに築城することにより、この問題の解決をはかったものと思われる。

取添グループも、基本的には第二期の築城と同じ理由であるが、比較的屋敷地を確保する考えが強いと思われる。

2. 各曲輪の概要

次に本丸以下の各曲輪について概要を述べるが、それぞれの遺構の解釈には現地調査の成果が当然使われる。しかしそれと同時に「都之城古絵図」（都城島津家所蔵）も使用したいと考えている。この古絵図は天和二年（1682）以前の成立と考えられるが、現地の遺構と極めてよく一致し、それぞれの遺構を考える上で、また復元する上でも非常に参考になるものである（以下この古絵図を文中では、単に絵図とする）。

I の曲輪は、絵図では本丸とされ、実際に中心の曲輪と位置づけられるものである。

虎口は絵図によれば、西側に二つ描かれている。現存の日豊本線よりの道²がそれと考えられる。b は現在は失われている。c は空堀であり、絵図によれば堀底道として使用せず遮断の掘としてのみ使われている。d は絵図に「弓場地」とされるが、これも空堀である。後に弓場として利用したため、「弓場地」と絵図に書き込まれたのであろうが、本来は遮断線としての空堀である。

a の虎口は本丸の最重要の虎口と考えられるが、他の曲輪のように枡形にしていない。アプローチが長いので結果的に枡形の役割があると考えたのであろうか。

曲輪周囲には、西面と南面に土塁があったらしいが、現在は西面の一部が残っている。北の先端の突出した土塁は橋台の役割もはたしたと思われ、防御上重要な位置を占める極めて貴重な遺構である。

e は腰曲輪である。本来はここに降りるための枡形虎口があったが、ある時期埋められていながら発掘により発見された。なぜこの虎口を埋めたかは不明だが、軍事的緊張により、虎口の閉鎖を必要とした可能性も考えなければならないだろう。

f は崩れであるが、この地点が外へ出るための虎口の可能性もある。曲輪面の枡形を埋めた段階で一緒に埋されたとも考えられる。

II は西域とも呼ばれていて、現在の狭野神社の地で、絵図には明屋敷・台（代）官所などの記載がある。明屋敷は、空屋敷の意で、絵図の成立当時既に使用されなかった屋敷であろう。とにかくここに代官所などの政治施設があったと推定できる。

虎口は g 地点であるが、既に破壊されている。h は現在の登り口であり、神社のできた時に作られたものであろう。

IIIの中之城は、既に破壊されている。しかし南堀の一部ではあるが遺構が残っている。i は枡形の残存であり、ほとんど失われた中之城の遺構として貴重である。j は虎口に至る通路の残存遺構と思われる。これも絵図に記載されている。が、絵図では判然としない。

IV の外城もほとんど宅地化で、遺構は失われている。

V は南の城であるが、ここも早い時期に削平され遺構はほとんど残らない。

VI は小城といわれる地であるが、残念ながらここは調査できなかった。

唯は池之上城と呼ばれていた。名称の由来は西と南に面してあった水堀の長池からであろう。この曲輪は、南の一部が日豊本線によって破壊されているのみで、極めて良好に保存されている。虎口は k と l であるが、いずれも枡形としている。特に k は枡形の雰囲気がよく残っている。ただし、曲輪内に入るのは、右折するように絵図には書かれているが、このあたりはよくわからなくなっている。m は空堀状になっているが、絵図には井戸があったように書かれている。n は空堀である。長池に面した側に何らかの防御上の不安（この長池は自然の谷筋であったと思われる所以、側面がなだらかであったため防御上不利と考えられたのであろう）を解消するために、この城としては異例の横堀を掘ったものと思われる。堀の土塁は保存も良好である。

唯は新城の地であるが、ここも住宅地として開発され遺構はほとんどない。わずかに、o が新城の曲輪面の一部とみられる。p は土塁で、これは保存がよい。

II と VI・唯に囲まれた地は、屋敷地として使われていたらしい。特に都島のあたりは土塁

みの屋敷地となっている。東側の地は入り口が折形になっておりかなり重要な人物の屋敷地であったと考えられる（絵図では伊作太郎左衛門と記されている）。現在、遺構は全く失われているが、都島の小丘のみ残存している。

Ⅺは中尾城の地である。都之城の曲輪の中では最も小さい。遺構の残存はすばらしく、ほとんど完全に残っている。↑は折形で、登り口の取り付け部分は民家によって壊されているが、折形そのものはよく残っている。正面にぶつけて鍵形に曲がるようにしている。↑は土塁でこれも良好に残っている。この土塁は池之上城の横堀と同様長池と↑の空堀の遮断線の強化のために、城内の防御の中で特に重要な位置づけがしてあったと思われる。

Ⅻは中尾之城・中尾城の地で、Ⅺの中尾城と同じ曲輪名であるが、その同名にした意図は不明である。もしかしたら、本来同一の曲輪であったのを、長池につなげるよう↑の空堀を入れて独立させ前線の橋頭堡的な役割の曲輪としたものかもしれない。

Ⅹの曲輪は、日豊本線により二つに分割されているが、ちょうどこの地点に本来は空堀状の通路があつたらしい。通路といつてもかなり大規模なもので、絵図の書き方からすると、↑に匹敵する大きさである。この空堀道はそのまま西にいくと大きな折形につきあたり、中尾口と称されていた。ここが大手口の役割を果たしていた。

Ⅹの南の中尾城は、日豊本線の側が著しく破壊されているが、他はよく残っている。特に東南のエリアがよく残っている。↑は折形の遺構である。↑は空堀で折形への通路の遮断のためのものであろう。↑は削平地で階段状に小曲輪を置く。絵図には二重・三重・四重・五重と書かれ、四段の小曲輪を描くが、現状では二段のみ残っている。

Ⅸの北部の中尾之城も保存度は良好である。特にWのエリアがよく残る。ほぼ絵図通りに残存しており貴重である。ここは折形Yに至る道を防衛している。Xの土塁も極めてよく残存している。Zも虎口である。↑は堅土壁で腰曲輪内の移動を遮断している。

↑は堀切で極めて大規模である。遺構もすばらしくよく残っている。この堀切が台地と切り離す役割を果して、城内の数多くの堀の中でも最重要のものといえよう。↑の堀切は北側のものが堀底を階段状に造成している。

↑は絵図に島状に書かれているものである。Ⅸの中尾城に続く細い台地なので、いくつかの堀切で分断したものであろう。台地上は自然地形で城として使う気はなかったようである。↑は小さい堀切で、台地から切り離している。

↑は取添と呼ばれる曲輪で、最も最後に作られた曲輪である。現在はほとんど堀は埋められている。しかし地割などに堀の形跡は残り、ほぼ位置は推定できる。（斜線部がその推定の堀である。）

曲輪内も遺構はほとんどないが、用水路（かつての川で堀として利用していた）沿いに遺構が残っている。↑は島津家の墓地で、土塁で囲まれていたと思われる。↑は堀状の通路の残存である。↑は土塁囲みの空間であるが、絵図の坂元甚五左衛門の屋敷地に比定できる。南面しているので、木を切り払えば住環境は良いはずである。↑のあたりはいずれも屋敷地である。↑は堀切で虎口の防衛のためだろう。

3. 都之城の遺構

以上見てきたように、都之城は破壊されたイメージが強い割には、意外と遺構は残っている。特に本丸・西城・池之上城・Ⅹの中尾城・Ⅺの中尾之城・中尾城はそれぞれよく残存している。取添も川沿いの部分はよく残っている。

それぞれの曲輪の虎口がよく残っているのもこの城の特徴であろう。池之上城・Ⅹの中尾城・Ⅺの中尾之城・中尾城の虎口の構形はほとんどが無傷で残っている。その数は六つに及んでいる。南九州の城は一般に明瞭な虎口が少ないが、この城では表面観察と江戸期の絵図がよく一致し、いずれも構形と確認できるもので、極めて貴重である。

さともの堀もよく保存されている。いずれも大規模な工事がうかがえ、圧巻である。これらの堀は先人の遺産として広く市民に知らせる必要があろう。

4. 絵図について

天和二年以前の作製とされる絵図は、極めて現状の遺構と一致し貴重である。既に破壊されている部分も、この絵図の記載により推定復元も可能である。この絵図と現状の遺構をよく対応させて読み込んでいけば、都之城の細かい遺構の意味を明らかにすることも可能になろう。

次にこの絵図の大きな価値は、曲輪の使い方が推定できる点である。南九州のこのような同等の曲輪を大量に作る城は、まだいい用語はないがとりあえず「群郭式城郭」と呼ばれている。こうした城郭の曲輪がどのように利用されていたかは、日本城郭史の大きな課題であるが、この絵図によれば、曲輪内はいくつかに分割されそれに重臣が居住していたらしい。それぞれの重臣がはたして実際に居住していたかどうかは、これからの研究による以外はないが、少なくとも江戸の初期にはそのような伝承があったのであろう。これは現存する曲輪に入る構形を見ても防衛に有利なようにすることよりも、屋敷割の通路に合わせているらしいことも傍証となろう。

この都之城から遠く離れた青森県の浪岡城も、いわゆる「群郭式城郭」として知られている。この城は北畠氏の居城で八つの曲輪で構成されている。その内の北館^③という曲輪が発掘された。この曲輪内は八つほど（時期によって違う）に屋敷割されそれに家臣が居住していた。この曲輪内は一定グループがいたと考えられているが、これとほぼ同様の様子が絵図からうかがえる。もちろん都之城の場合同一曲輪に住む家臣がそれぞれの曲輪でグループ編成されていたかどうかは不明であるにしろ、現象的には似たような形で集住していたのは確実である。これは日本の城郭を考える上で、極めて重要な問題を提起すると思われる。なおこの遺構は廃城時の江戸初期のものではあるが、その限界性を考えた上で、発掘の成果も含めれば、中世末の姿も類推できよう。

この絵図の読み取りは、先に述べたようにこれから課題であるが、この絵図と見事に対応する城郭が、一部は破壊されながらも、なお大部分の遺構を残しているのは、極めて喜ばしい

ことである。遺構の分析と絵図の検討が進んでいけば南九州の城の意味とそれと関連する権力構造に肉迫することも可能である。

残る遺構の保存と有意義な整備を期待したい。

注

- 1 ……この絵図にはほぼ同様の図が二面存在し、その内の一面が天和二年写とされるので、天和二年以前の成立は間違いない（重永卓爾氏の教示による）。しかし、絵図の成立時に既に「明屋敷＝空屋敷」などの記載があり、他の場所でも建物が使われていないと思われることから、絵図の状況は廃城の元和元年（1615）に近い時期を表わしていると考えてよいだろう。
- 2 ……本丸は比較的新しい言葉であり、近世初頭の畿内で使われ始めたと考えられる。従って都城の場合、中世は主郭が「本丸」と呼ばれていた可能性は少ない。この絵図の「本丸」の名称は少くとも天正末年に至って使われだしたものであろう。
- 3 ……『群郭式城郭』の名称は用語としては問題があるが、とりあえず仮称として使用する。比較的大型の曲輪が多く並ぶタイプという。村田修三氏は「辺境型」（『図説中世城郭事典』新人物往来社、1987年）と仮称し、また千田嘉博氏も「九州館屋敷型」など（『戦国期城郭・城下町の構造と地域性』『ヒストリア』第129号、1990年）と仮称したものと同じものをさす。
- 4 ……工藤清泰「浪岡城跡の発掘調査成果から見た北日本における中世城館研究の課題」（『よねしろ考古』4号、1988年）

都之城

宮崎県 都城市 郡島町

調査/ 1991年1月19~21日

作図/ 八巻 勝史

地図題名/ 郡城市都城跡西側図

(1/5000 地図縮尺) (昭和56年都城跡の基に作成)

測量範囲/ 1/5000 地図縮尺

測量方法/ 重ねて計測した測量結果を用いた



III. 久玉遺跡(第3次調査)

例　　言

1. 本報告は平成2年度都城市教育委員会が実施した発掘調査概報である。
2. 調査は平成2年5月29日から同年8月31日までの期間で行った。
3. 方位はすべて磁北である。
4. 調査担当は矢部喜多夫で執筆、編集も行った。
また、遺物実測については、文化財整理作業員猪ノ股幸代、池谷香代子、水上和子の協力を得た。
5. 出土陶磁器類に関しては、佐賀県立陶磁文化館 大橋康二氏の指導を得た。
6. 本調査で出土した遺物は都城市教育委員会で整理・保管をしている。

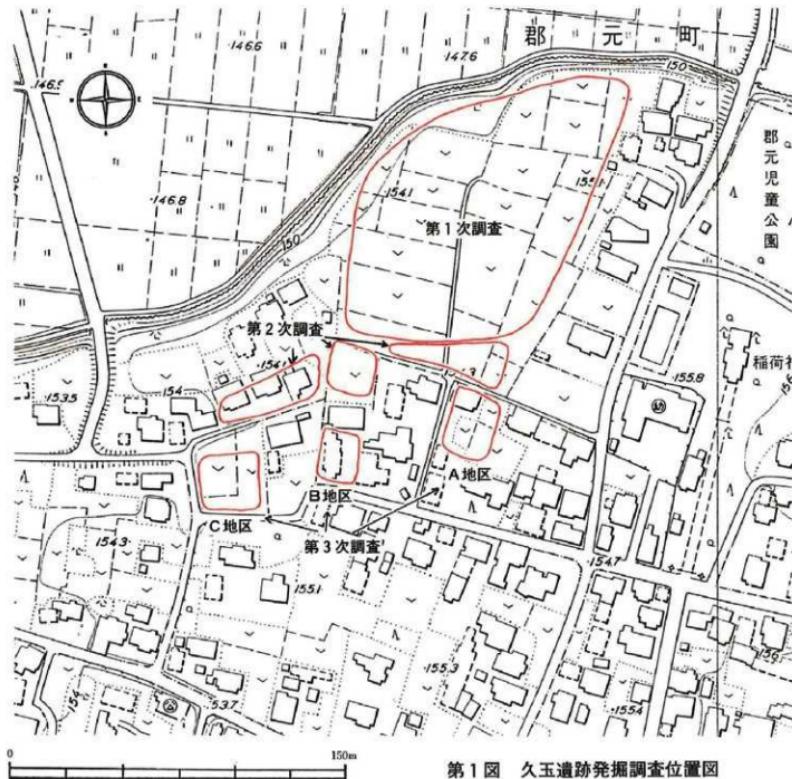
1. 調査に至る経緯

郡元・祝吉地区区画整理事業は昭和50年から実施され、すでに64%の土地が区画整理されている。それに伴う発掘調査は昭和55年をかわきりに平成2年度で第8次の調査を迎えるわけである。平成2年度、都城市区画整理事業の実施する同地区の区画整理事業面積は3.1haである。同年4月、同課と協議を行った結果、現況が畠地もしくは荒地である面積約1,600m²を同年5月29日から8月31日まで期間で発掘調査を実施することとした。

2. 遺跡の概要

久玉遺跡は都城市郡元町字久玉に所在する。

遺跡は都城市街地を形成する台地の北縁部、大淀川の支流である沖水川により浸蝕された河



第1図 久玉遺跡発掘調査位置図

岸段丘を呈し、北側低地水田との比高差が約10mの標高約150m程に立地している。郡元・祝吉町内の遺跡は西から祝吉遺跡、松原遺跡そして久玉遺跡と連続してつながっており、地形的からもお互い関連性の強い遺跡であることがうかがえ、発掘調査の結果からも中世から近世の大規模な集落跡であることがわかつてきている。

当遺跡の基本土層層序は、第Ⅰ層耕作土・第Ⅱ層白ボラ(文明期に桜島より噴出した軽石)・第Ⅲ層黒褐色砂質土・第Ⅳ層御池ボラ・第Ⅴ層漆黒粘土質土・第Ⅵ層アカホヤ・第Ⅶ層明黒褐色シルト…と続く。遺物包含層は第Ⅲ層黒褐色砂質土で、遺構検出面は第Ⅳ層御池ボラ上面である。また、調査区域をA地区、B地区とC地区に分けた。

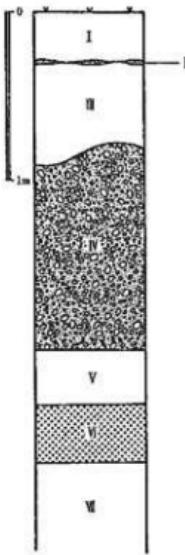
3. 調査の内容

調査は、調査区域をN・S線に一致するグリッド法による $10 \times 10\text{ m}$ のメッシュに区割した。このメッシュは久玉遺跡第1次調査と同じものを用い、南北方向は北からアルファベットを東西方向は東から算用数字を用いて表記した。

(A地区)

久玉遺跡(第2次調査) A地区の南側隣接地約600m²を調査した。現況が宅地跡のため、部分的に検出面の御池ボラ層まで搅乱を受けたところがあった。

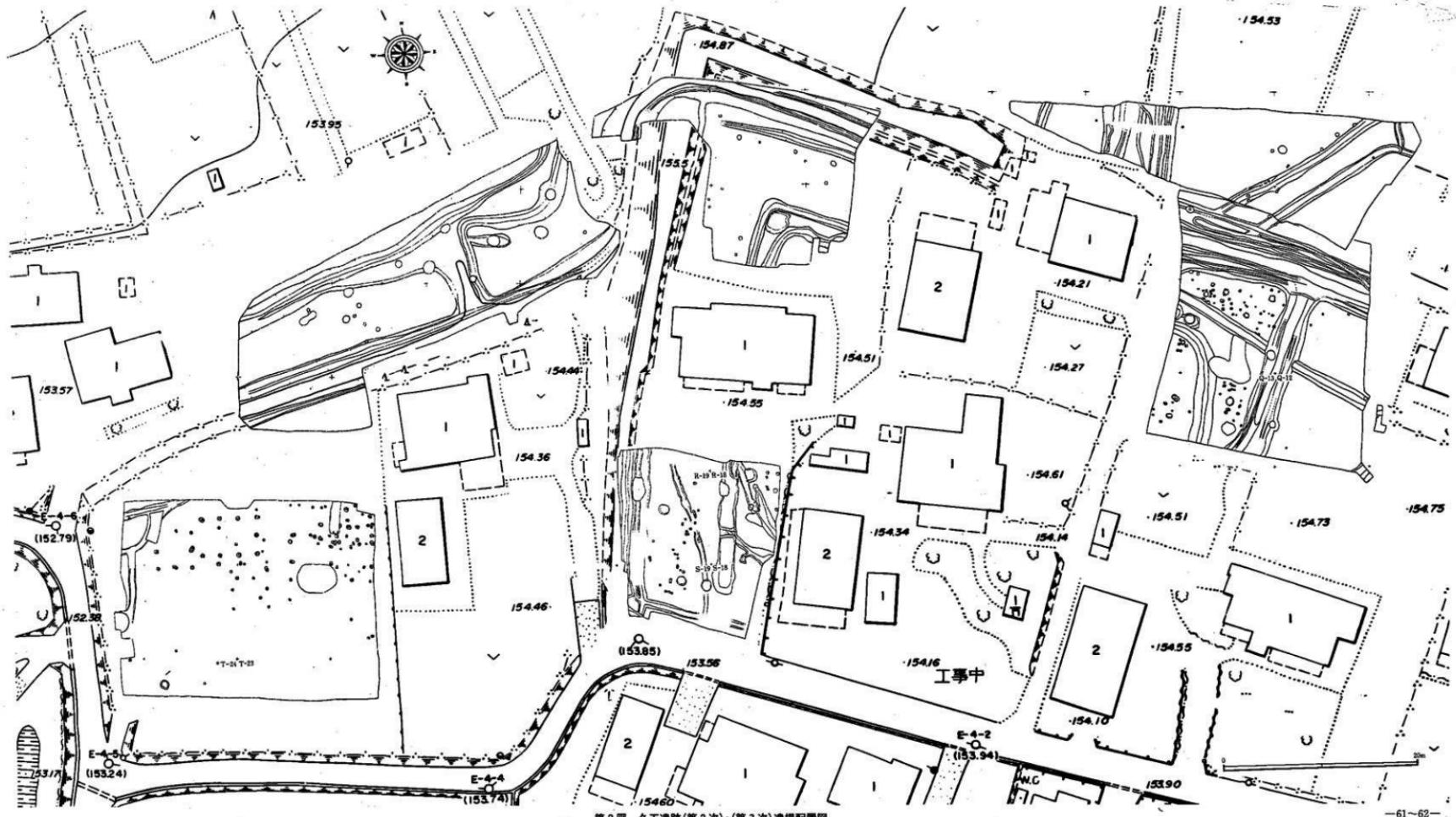
道路遺構は久玉第1次・第2次調査で検出した道路に連続するものと思われる。第1次調査により、N・14区から北側はほぼ直線的に北に延び崖下の低地水田に下っている。N・14区から南側では民家によって発掘調査が出来なかつた



基本土層柱状図

溝	形 状(m)			埋 土	備 考
	溝幅	底幅	深さ		
1号溝	0.7~0.8	0.3~0.4	0.2	第Ⅰ層 (灰黒褐色土)	第Ⅰ層
2号溝	0.7	0.4	0.15	第Ⅱ層 (御池ボラ上)	久玉(第2次)の 2号溝と同一
3号溝	1.0	0.8	0.25~0.4	第Ⅲ層 (黒褐色土)	久玉(第2次)の 3号溝と同一
4号溝	0.6~0.8	0.4~0.5	0.45	第Ⅳ層 (黒褐色土)	
5号溝	0.6~0.7	0.3~0.4	0.50	第Ⅴ層 (灰褐色土)	
6号溝	0.6	0.2	0.3	第Ⅵ層 (灰褐色土)	
7号溝	0.5~0.6	0.1~0.3	0.35~0.25	第Ⅶ層 (黒褐色土)	
8号溝	1.1~1.4	0.4~0.6	0.4~0.6	第Ⅷ層 (御池ボラ・黒褐色土)	
9号溝	1.1~1.4	0.5~0.7	0.3	第Ⅸ層 (御池ボラ上)	
10号溝	1.8~2.0	0.4~0.6	0.8	第Ⅹ層 (灰褐色土)	白ボラ以降に埋積
11号溝	1.2	0.8	0.4	第Ⅺ層 (灰褐色土)	
12号溝	0.3	0.2	0.2	第Ⅻ層 (灰褐色土)	
13号溝	0.4	0.2	0.1	第Ⅼ層 (灰褐色土)	

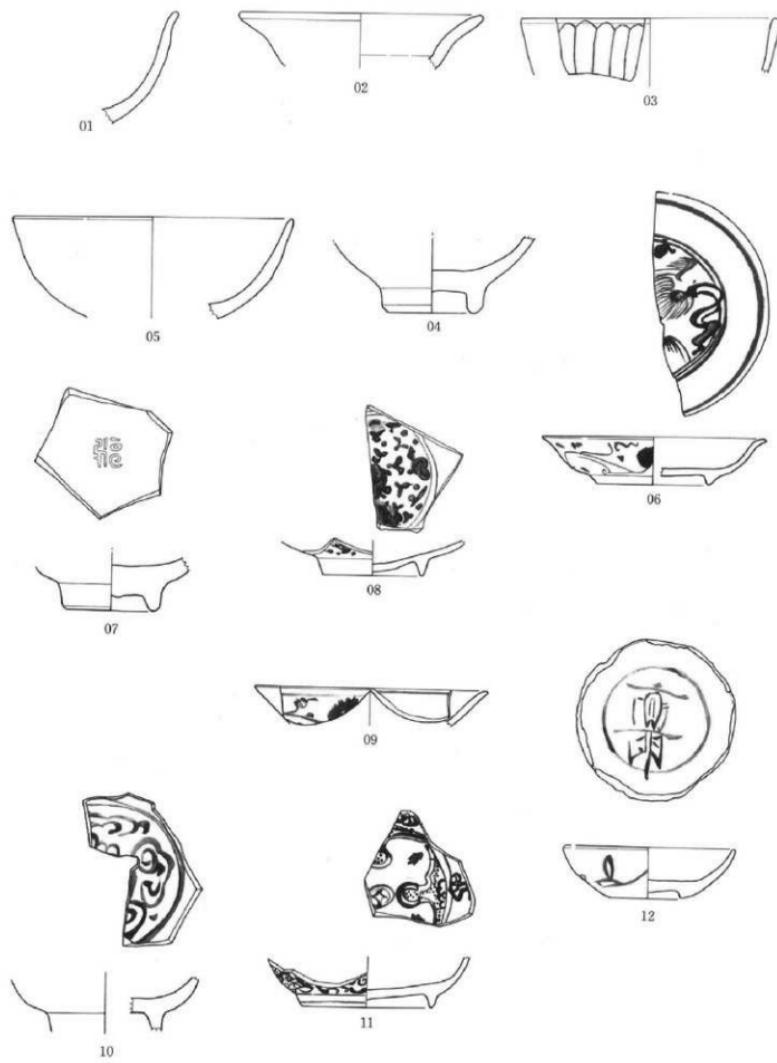
久玉遺跡(第3次) A地区溝状遺構観察表



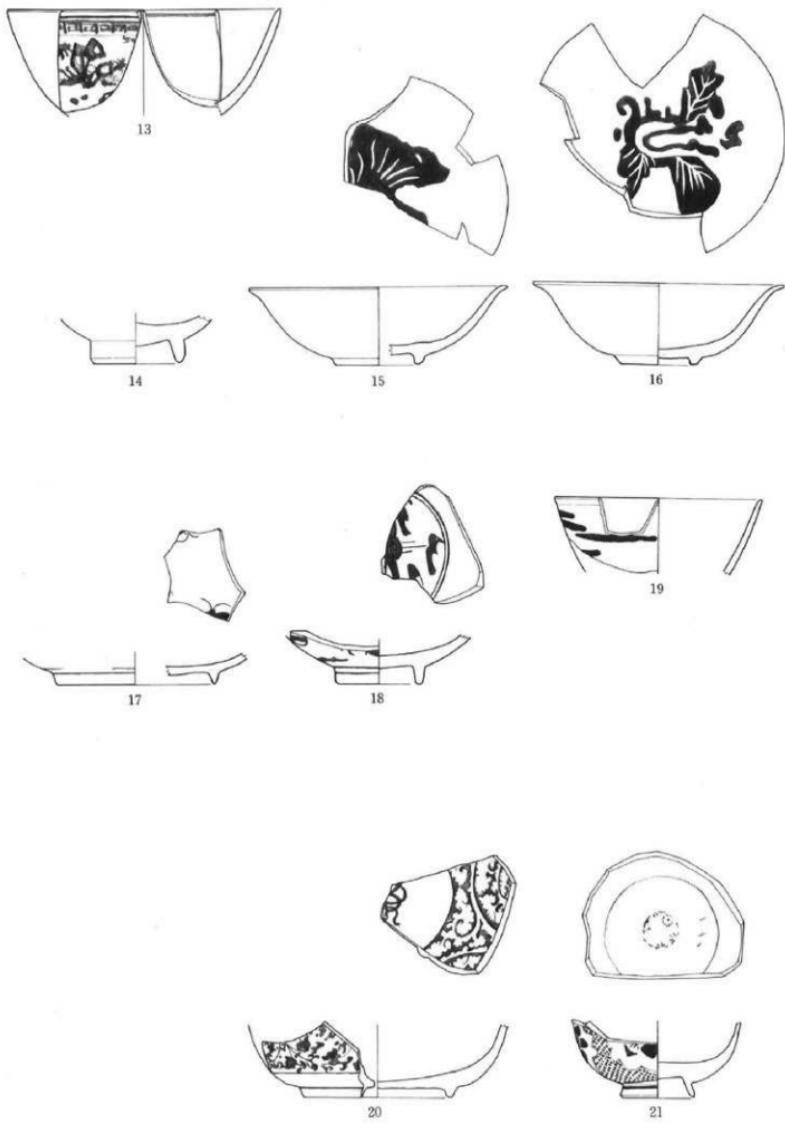
第2図 久玉道路(第2次)・(第3次)造成位置図



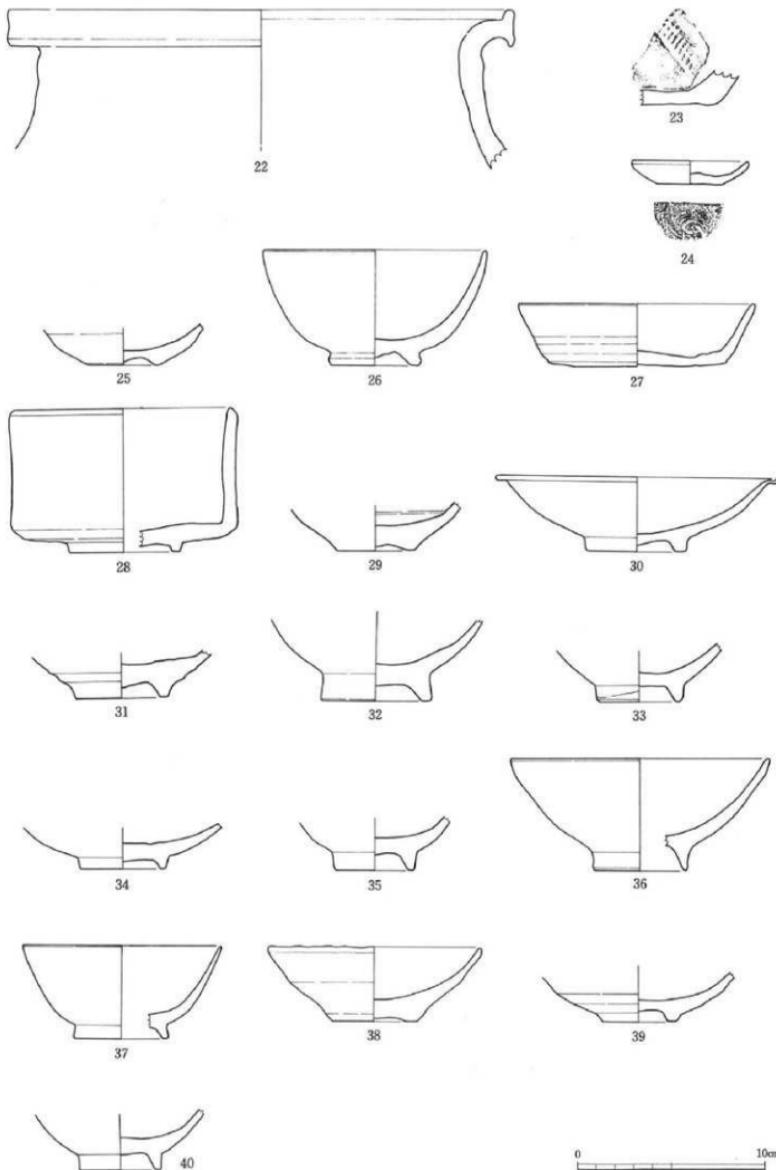
第3図 久玉遺跡(第3次)A地区遺構配置図



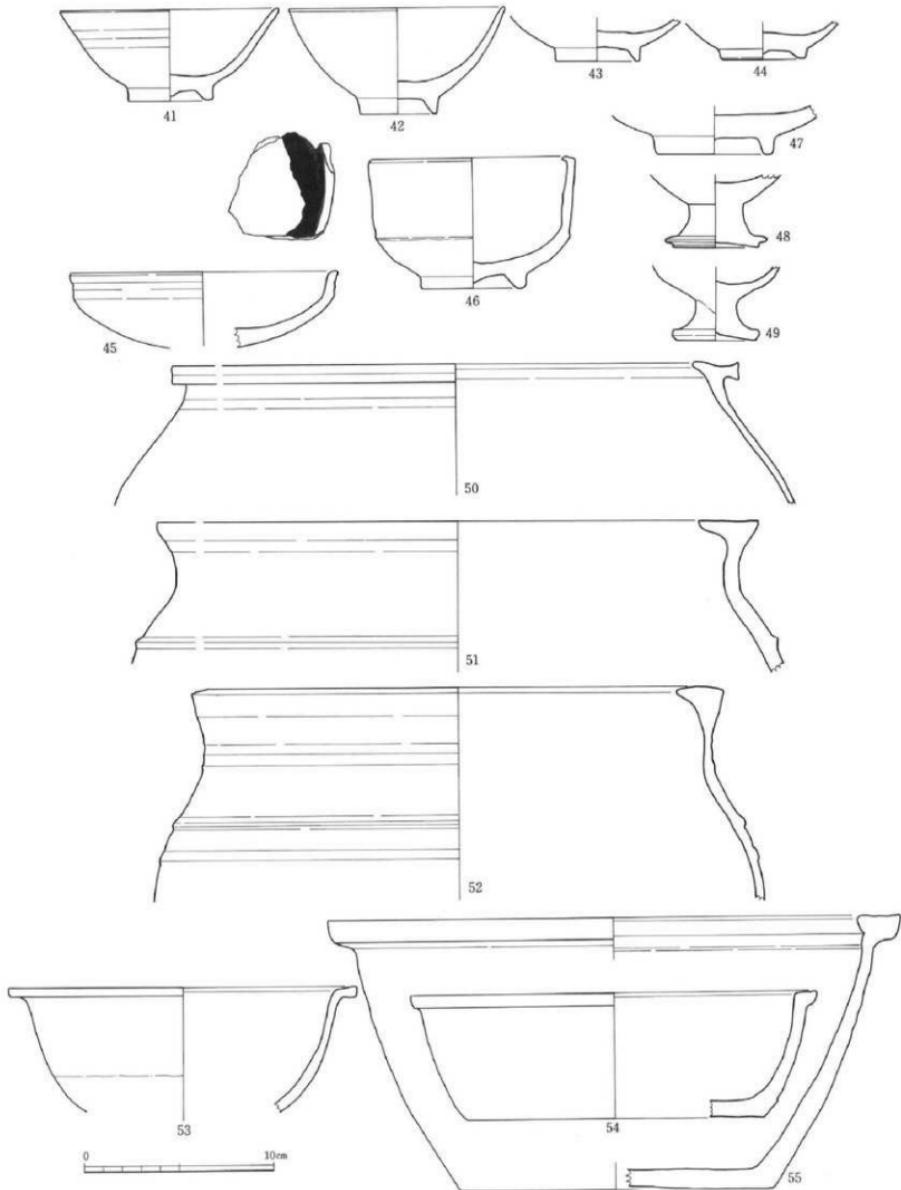
第4図 久玉遺跡(第3次)A地区出土遺物実測図〈1〉



第5図 久玉遺跡(第3次)A地区出土遺物実測図〈2〉



第6図 久玉遺跡(第3次)A地区出土遺物実測図〈3〉



第7図 久玉遺跡(第3次)A地区出土遺物実測図〈4〉

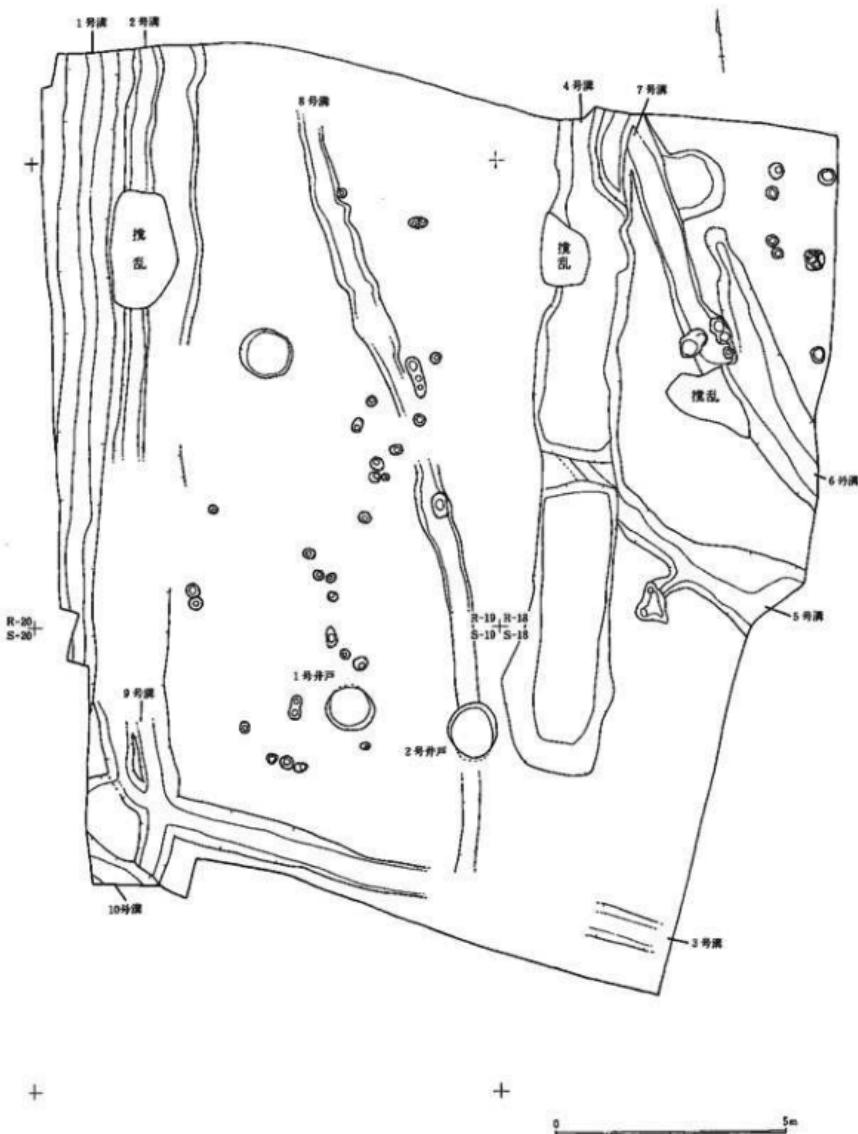
調査 区分	地層 区分	アリヤド (底 部)	標 高 (m) ○柱 高さ 記述	特 色	標 号	地質 種別 (番号)	地質 特徴	アリヤド (底 部)	標 高 (m) ○柱 高さ 記述	特 色	標 号		
16	青 土 壤	P-12	-	-		14C末～15C初	29	砂 壤	Q-12(19号跡)	-	4.1		
17	青 土 壤	Q-12	12.2	-		14C末～15C初	30	砂 壤	Q-12	15.2	5.4	4.0	
18	青 土 壤	(Q-12) 14C(後半)	14.0	-		14C末～15C	31	砂 壤	P-12	-	5.0	砂質	
19	青 土 壤	P-12	-	4.8	14C末後半文(辛口塗)	14C末～15C	32	砂 壈	Q-12	-	5.0	砂質	
20	青 土 壈	P-12	15.0	-		14C末～15C	33	砂 壈	Q-12	-	4.4	砂質	
21	青 土 壈	P-12(1井+7井)	12.5	6.0	5.5	14C末後半文 柱状土+土+砂埴塗	15C末～16C初	34	砂 壈	P-12	-	4.4	砂質
22	青 土 壈	P-13	-	4.8	14C末後半文 柱状土+土+砂埴塗	15C末	35	砂 壈	Q-12	-	4.3	砂質	
23	青 土 壈	P-14	-	5.4	14C末後半文 柱状土+土	14C末～14C初	36	砂 壈	Q-12(1井跡)	14.0	5.6	6.0	
24	青 土 壈	Q-12D(1井跡)	12.4	--			37	砂 壈	Q-12(1井跡)	15.0	5.0	5.0	
25	青 土 壈	P-12(1井跡)	-	-	以上より1井を除くタイル	14C末～14C初	38	砂 壈	Q-12	11.5	6.0	4.0	
26	青 土 壈	Q-12	7.0	-	14C末後半文 柱状土+土	14C未～P-12	39	砂 壈	P-12	-	4.1	砂上層	
27	青 土 壈	Q-12	9.2	4.1	2.8 14C末後半文+柱状土	14C末～P-12	40	砂 壈	P-12	-	4.6		
28	青 土 壈	Q-12(1井跡)	14.8	-		14C末～17C初	41	砂 壈	Q-12(1井跡)	11.8	4.5	4.9	
29	青 土 壈	P-12(1井跡)	-	4.6		14C末～14C初	42	砂 壈	Q-12	11.8	6.2	5.7	
30	青 土 壈	Q-12	14.6	4.5	4.2 柱状土	14C末後半文 柱状土+土+柱状土	43	砂 壈	Q-12(1井跡)	-	4.6		
31	青 土 壈	P-12(1井跡)	13.4	4.2	4.4 各層文	14C末後半文 柱状土+土+柱状土	44	砂 壈	Q-12	-	4.6		
32	青 土 壈	P-13	-	8.5	-	17C未	45	砂 壈	Q-12(1井跡)	14.4	-		
33	青 土 壈	P-13	-	4.5	-	14C末～15C初	46	砂 壈	Q-12(1井跡)	10.8	5.6	7.0	
34	青 土 壈	Q-12(1井跡)	11.2	-	-	14C未	47	砂 壈	P-12(1井跡)	-	5.5		
35	青 土 壈	P-12(1井跡)	8.0	-	14C末後半文+高層板	14C未	48	砂 壈	Q-12	-	4.5		
36	青 土 壈	P-12(1井跡)	4.0	-	中型板塗	14C末後半文+大土	49	砂 壈	Q-12(1井跡)	-	4.2		
37	青 土 壈	P-12(1井跡)	27.0	-	-		50	高 土	Q-12	38.5	-	14C末～貝口板	
38	青 土 壈	Q-12	-	-		14C未	51	高 土	Q-12(1井跡)	32.2	-		
39	土 壹 壈	Q-12	8.2	3.5	1.3 烧け土		52	高 土	Q-12	38.8	-	14C未	
40	青 土 壈	Q-12	-	3.4	-	14C未	53	高 土	Q-12(1井跡)	34.4	-		
41	青 土 壈	P-12(1井跡)	12.0	4.4	6.2 中型板	14C末～17C初	54	高 土	P-12	33.8	34.0	6.7	
42	青 土 壈	P-12(1井跡)	12.3	9.2	3.4 ハウツ		55	高 土	P-12(1井跡)	30.8	47.3	44.5	
43	青 土 壈	Q-12	11.1	5.8	7.7 7井跡	14C末～17C初							

久玉遺跡(第3次) A地区出土遺物観察表

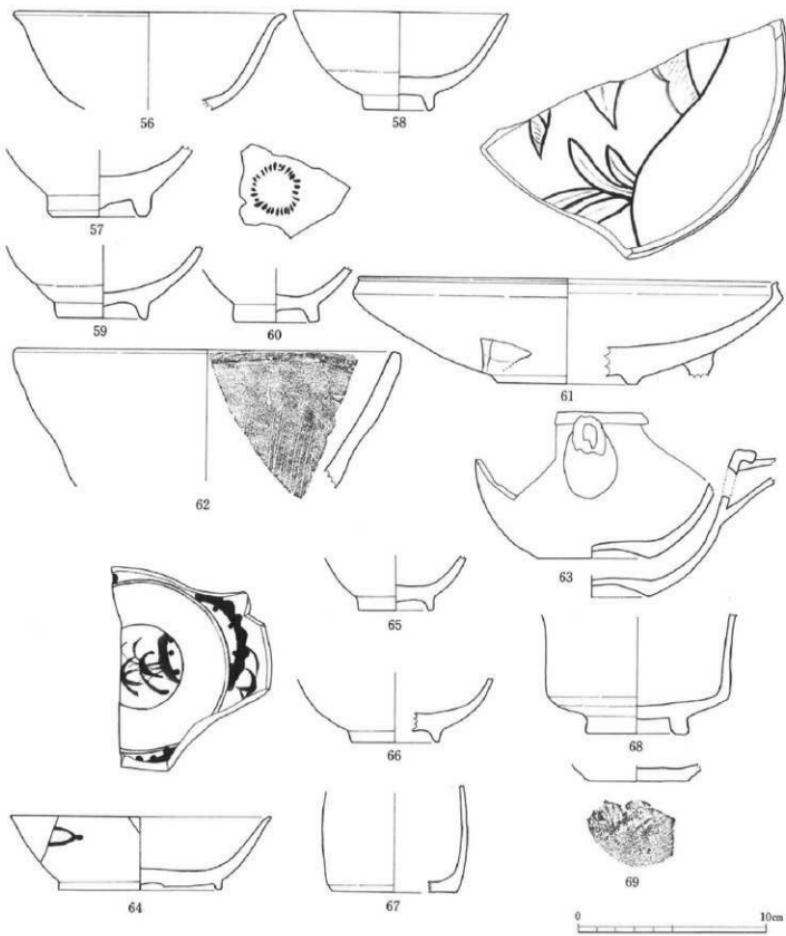
ため推測の域を越えないが、第2次調査で検出した西から東へ走行する道路とつながり、民家の敷地内で南北方向に進む道路とT字型に交差すると思われる。このA地区で東西方向に走行する道路はP・12区でさらに南に屈曲しそのまま直線的に延びている模様である。この道路は東西方向では最低2層の硬化面を、南北方向では1層の硬化面をそれぞれ確認できる。下位の硬化面は白ボラ混土が硬化層となっており、上位のは黒色土系の土が硬化層となっている。このことは、P・12区で南へ分岐することがある時点で廃棄されたと考えられる。この道路は両側に側溝様の溝を備えている。他、溝状造構が13条、井戸造構1基、土坑2基、ピット等を出土した。

〈B地区〉

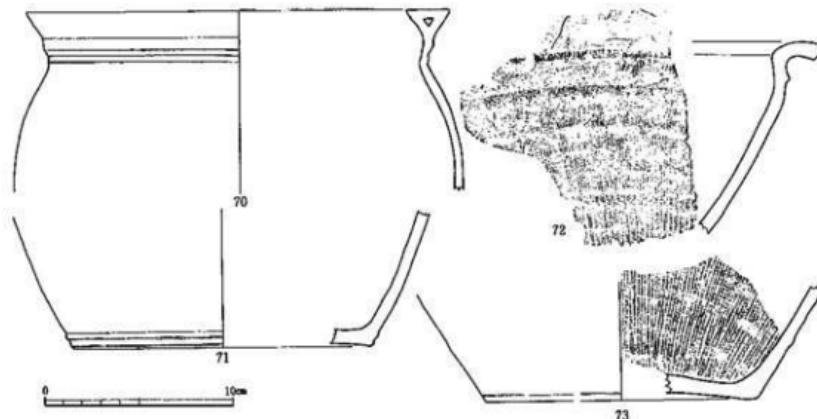
A地区南西の宅地跡荒地約400m²を調査した。現況は宅地の基礎等により遺跡包含層はかなり搅乱を受けていた。部分的に検出面の御池ボラ層まで擾乱が及んでいたところもあった。造構は溝状造構が10条、井戸造構が2基出土した。1号溝は埋土に白ボラを含み、北側調査区外で南北方向に溝状の落込みがみられることから、1号溝はほぼ南北に一直線に延びていると思われる。また2号溝はこれに隣接して内走している。



第8図 久玉遺跡(第3次)B地区遺構配置図



第9図 久玉遺跡(第3次)B地区出土遺物実測図<1>



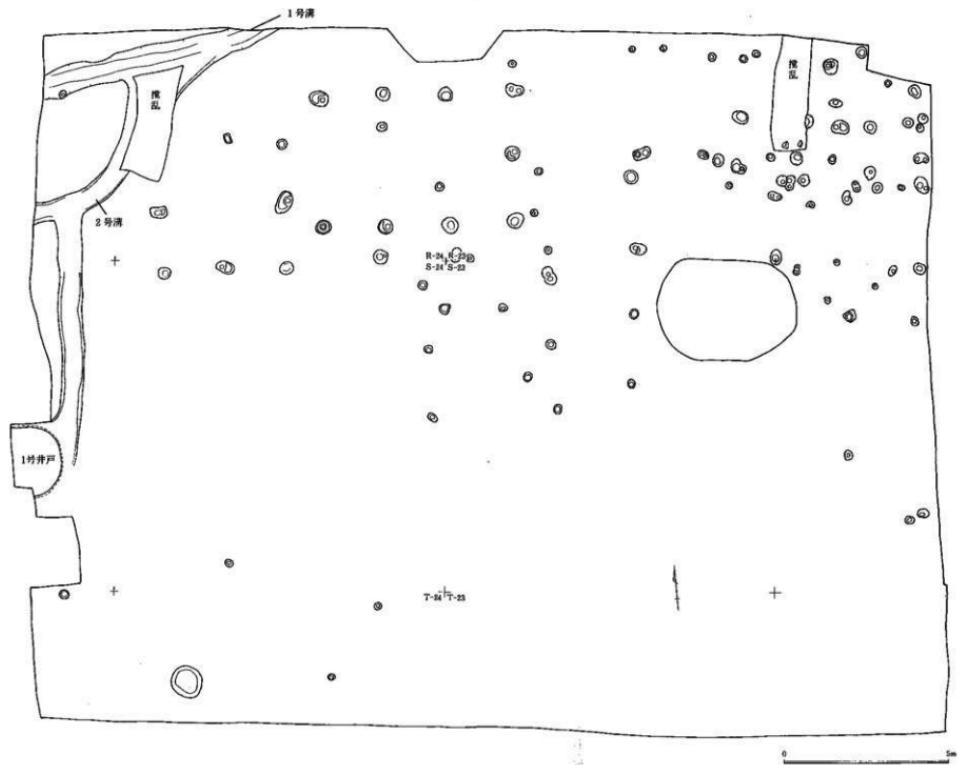
第10図 久玉遺跡(第3次)B地区出土遺物実測図〈2〉

遺物 番号	基層 名	アリッヂ (直 径)	底 直 (直 径)	分 類	標 本 名	遺物 番号	基層 名	アリッヂ (直 径)	底 直 (直 径)	日 期	年 代
56 宽口瓶 Q-18-Q-19	14.0	—			14C末～15C初	65	厚 壁 直行	11-19(5号標)	—	4.0	—
57 青磁瓶 Q-19(1号標)	—	8.0	—		15C末	66	厚 壁 直行	—	—	4.0	—
58 青磁瓶 Q-19	11.0	2.7	5.3		—	67	厚 壁 直行	—	—	4.0	—
59 青磁瓶 —	—	4.5	—		—	68	青 壁 直行	—	—	3.4	—
60 纹付瓶 R-18(5号標)	—	4.5	—	青葉込み輪花文 高台部	細織伊豆瓦 1450-1500	69	上斜面+底 13-19(2号標+?)	—	—	—	—
61 青磁大瓶 Q-18(6号標)	22.5	7.6	5.6		13C後～14世紀	70	厚 壁 直行	13-19(3号標)	22.5	—	14世紀後半
62 上斜面瓶 Q-19(1号標)	20.5	—	—	縫合～空洞	—	71	厚 壁 直行	—	—	—	—
63 青磁瓶 Q-18(5号標)	17.0	6.6	7.0		—	72	青 壁 直行	13-19(2号標)	—	—	—
64 青磁瓶 Q-18(5号標)	14.0	6.8	4.0		14C末～15C初	73	青 壁 直行	13-19(3号標)	—	—	—

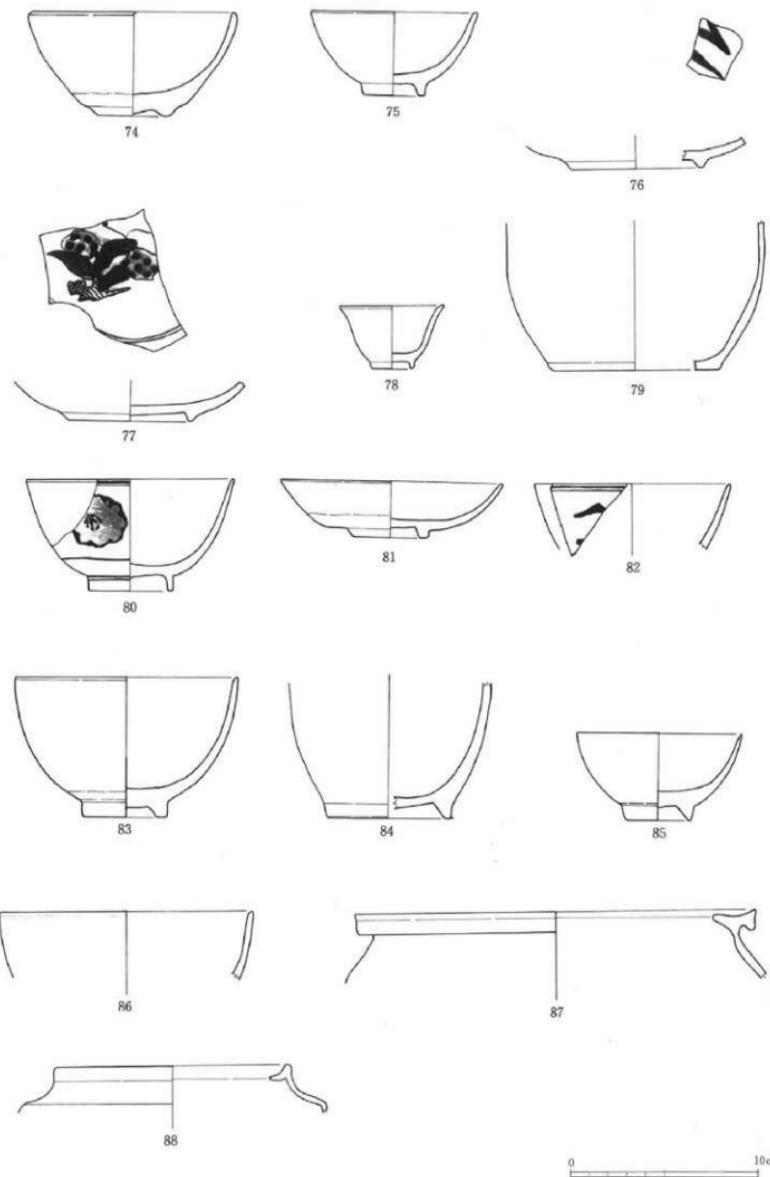
久玉遺跡(第3次)B地区出土遺物観察表

(C地区)

B地区の西側畠地約600m²を調査した。遺物包含層の第Ⅲ層、検出面の御池ボラ層とも保存状態は良好であった。造構は溝状造構2条、掘立柱建物跡4棟を検出した。他、ピットがかなり出土しており、埋土により大まかに2時期に分けられる。74はR・23区ピット27の検出面上位より出土している。



第11図 久玉遺跡(第3次)C地区遺構配置図



第12図 久玉遺跡(第3次)C地区出土遺物実測図

遺物 番号	場所 名	形態 類別	ダミー・P (遺物番号)	法 寸 (cm)	特 徴	種 類	遺物 番号	種類 (遺物番号)	ダミー・P (遺物番号)		法 寸 (cm)	特 徴	種 類	考 察
									口径 横径 高さ	底 面				
74 遺跡 磐 T-24(1号井)	10.5 4.0 5.0	馬蹄形 底面	EMC水～15C付	底付 面	T-24(1号井)	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—
75 遺跡 磐 T-24	9.0 3.3 4.0	—	EMC12区	底付 面	H-24	12.0	4.5 7.5	馬蹄形 底面	—	—	—	—	—	AVC底 H-24
76 遺跡 磐 S-25	— 7.0 —	—	底付 面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	VFC底～15C
77 遺跡 磐 T-24(1号井)	8.5 — —	馬蹄形 底面	EMC水	底付 面	T-24(1号井)	9.0	3.6 4.7	馬蹄形 底面	—	—	—	—	—	15C13時
78 古墳 小M S-24	8.6 2.2 3.4	—	EMC水～15C前	底付 面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15C中
79 遺跡 磐 T-24	— 9.0 —	—	EMC水	底付 面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
80 遺跡 磐 T-24(1号井)	11.2 4.5 4.0	—	EMC水～15C前	底付 面	P-23	12.5	—	—	—	—	—	—	—	—
81 遺跡 磐 T-24(1号井)	12.4 4.2 2.0	馬蹄形底付 面	EMC水～15C小	底付 面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

久玉遺跡(第3次)C地区出土遺物観察表

4.まとめ

久玉遺跡の発掘調査も今回で第3次を終えたわけで、第1次・第2次と第3次調査を合わせて、おはるげながら遺跡の様子が垣間みえてきたような気がする。

遺構について、道路遺構は最低2時期に分けられるよう、新しい時期の道路は第1次調査結果から北側低地水田面より南側台地へ上がりそのまま150m程一直線に進み、第2次・第3次調査から未調査の家屋下で東西方向にT字型に分岐している。次に、これ以前の道路は同じく水田面より南へ伸び、同家屋下で東に屈曲し、第3次調査よりP・12区で分岐し、一つはそのまま東進しもう一方は南へは直角に折れ進むようである。溝状遺構では第2次調査B地区の6号溝・7号溝、第3次調査A地区の10号溝と第3次調査B地区の5号溝・6号溝・7号溝は、推定ではあるが、東西方向約50m南北方向約35m規模で方形形状に区画すると考えられる。また、建物跡については、柱穴の埋土の違いから大まかに2時期にわけられるが、建物の規模が確認できるものは少なく、その中でC地区では埋土が灰黒褐色土の掘立柱建物跡が最低4棟出土している。

遺物について、第3次調査のA・B・C地区を通して、全般的に出土遺物が16世紀以前、16-17世紀、18世紀以降と3時期に大別できるようである。そのなかで、A地区10号溝内出土の染付(15・16)、B地区6号溝内出土青磁大皿(61)とC地区R・23区ピット内出土唐津碗(74)等は16-17世紀初頭の初期伊万里を含む上物である。前述した各溝状遺構の関連性が出土遺物からも伺え、この時期在地系の勢力の存在が考えられる。

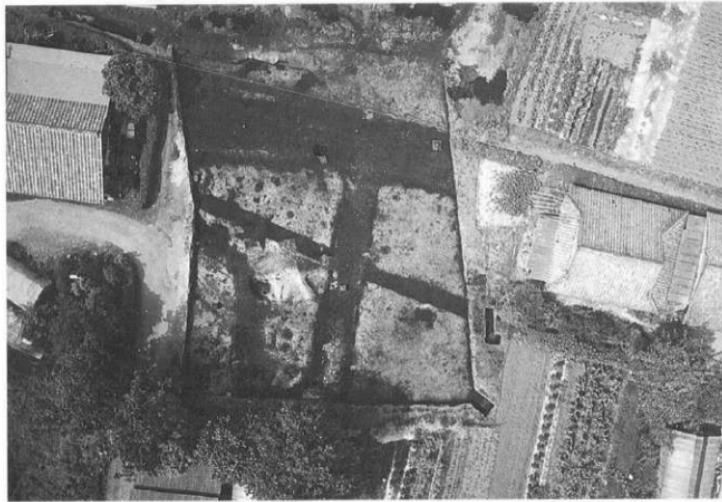
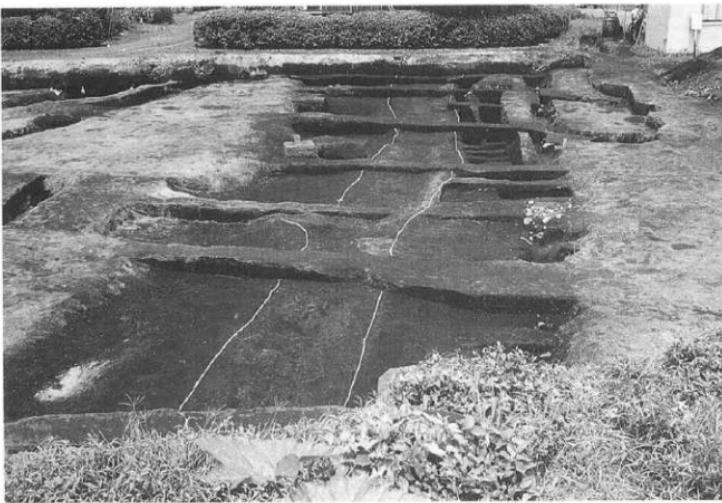
また、A地区9号溝(埋土は黒褐色土+白ボラ)内より常滑壺(22)と土師器壺(27)が出土している。常滑壺は赤羽一郎編年のⅢ期に相当し、実年代では13世紀後半から14世紀前半に比定できる。土師器壺は底部切離しがヘラ切りで、器壁はやや厚手で底部からの立ち上がりで段を有し、ほぼ直線的に立ち上がる。松原地区第I遺跡のI・A・2類に類似している。郡元地区では、ヘラ切りが13世紀後半まで存在することは確かなようである。

注)『常滑窯』「日本陶磁全集 8」 中央公論社



久玉遺跡(第3次) A地区

図版2

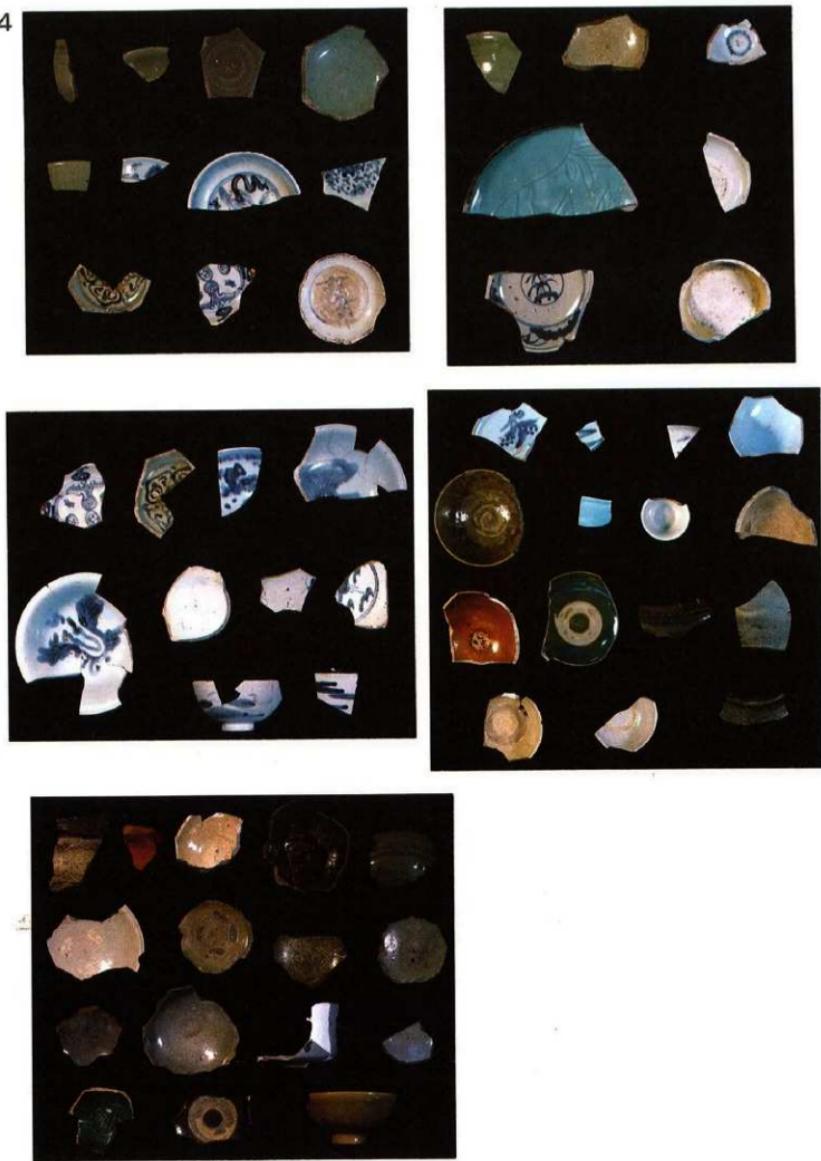


久玉遺跡(第3次) A 地区

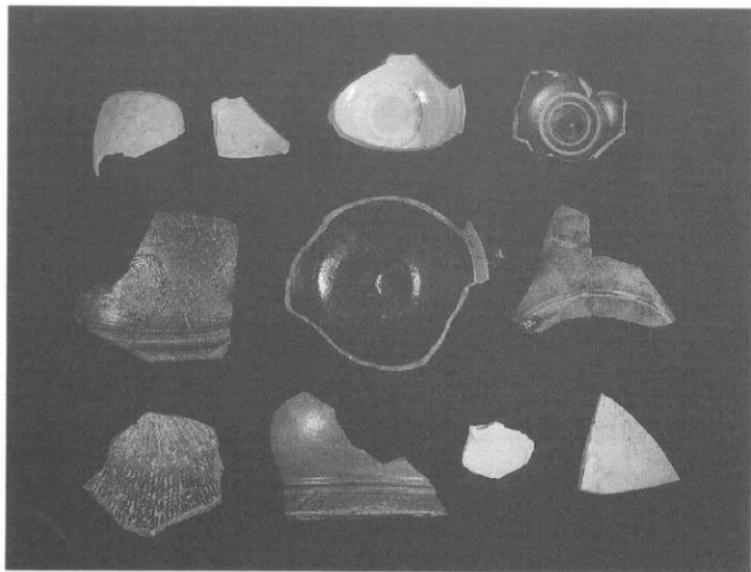
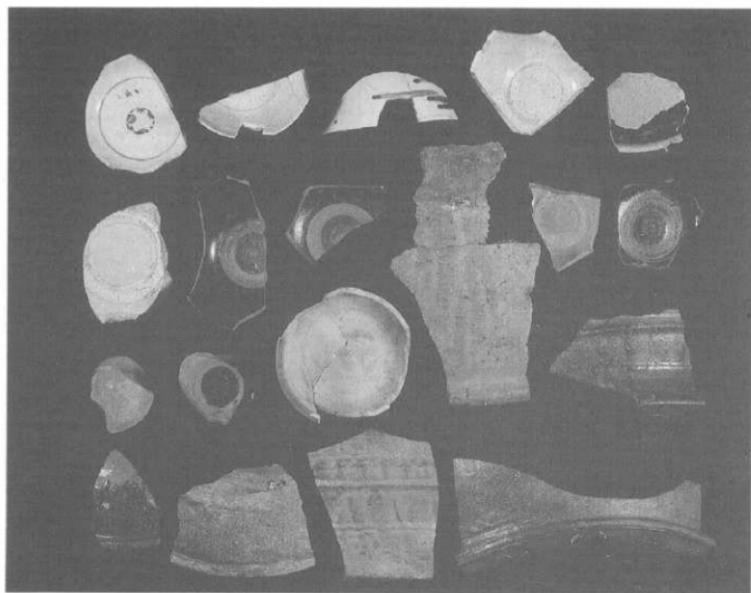


久玉遺跡(第3次)C地区

図版4



久玉遺跡(第3次)出土遺物



久玉遺跡(第3次)出土遺物

IV. 宮ノ下遺跡

V. 堂山遺跡(南地区)

VI. 牟田ノ上遺跡

VII. 屏風谷第1遺跡

IV. 宮ノ下遺跡

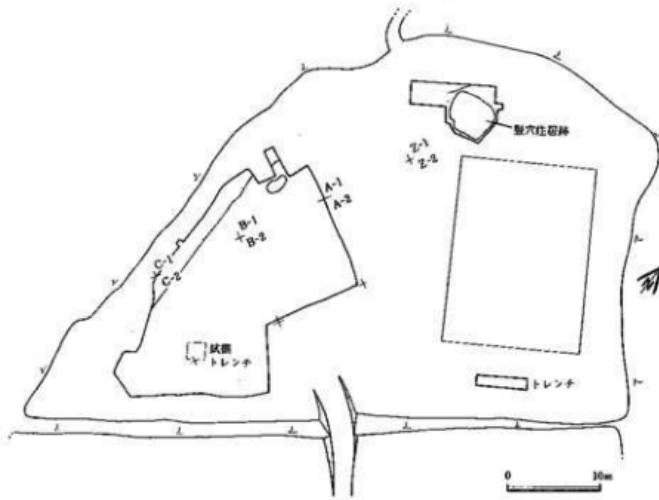
所在地 都城市金田町1228-21
調査主体 都城市教育委員会
調査期間 平成3年11月19日～12月18日
調査面積 400m²

本遺跡は、都城市建设部都市緑地公園課による金田児童公園再整備事業に伴う発掘調査である。平成3年5月15日に試掘確認調査を行った結果古代末から中世にかけての土師器や陶磁器類が出土している。

遺跡は霧島山系からのびる丘陵台地縁辺標高139m程に立地し、西側に河川氾濫原である水田面を望む。その比高差は約7mである。

遺跡の現況は東側隣接地の畠地と比べてすでに約1mほど削平をうけており、調査区

域南側では遺物包含層である第Ⅱ層（黒褐色土）がほとんど消失し、第Ⅰ層（客土+表土）から20～30cmで遺構検出面の御池ボラ層上面となっている。ところが、北西側では第Ⅱ層がかなり厚く堆積しており、同区域は東から西へ傾斜しているようである。遺構・遺物はZ・1区で弥生時代後期初頭の方形の竪穴住居跡1基を検出。また、古代末や中世の須恵器や土師器などが出土している。（矢部）



宮ノ下遺跡遺構配置図

竪穴住居跡検出状況



同完掘状況



V. 堂山（南地区）遺跡

所在地 都城市丸谷町2351-1

調査主体 都城市教育委員会

調査期間 平成2年9月12日—平成3年3月31日

調査面積 約4,000m²

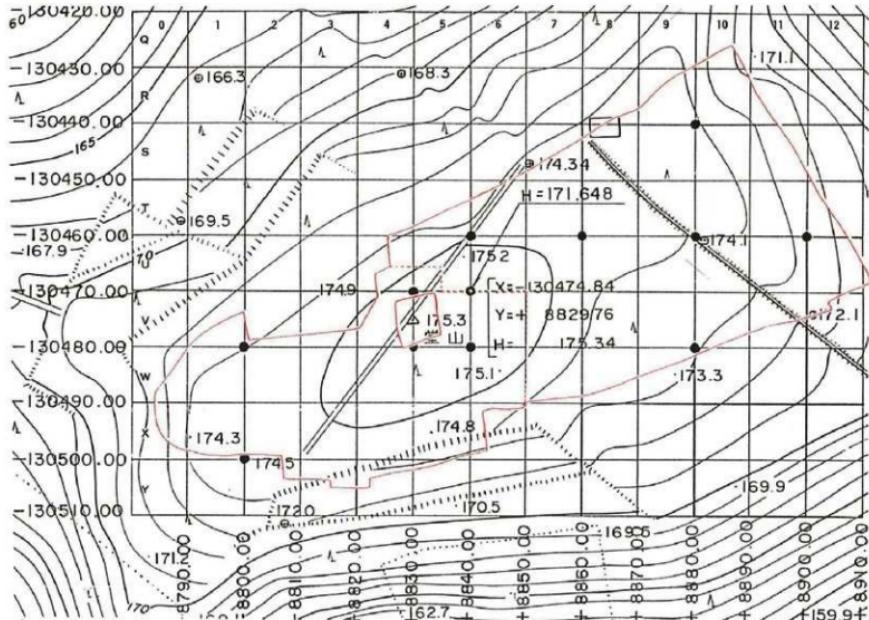
本遺跡は都城市土地開発公社による工業団地造成に伴う発掘調査である。すでに、同（北地区）は昭和63年度約5,000m²の発掘調査を実施し、縄文・古墳時代及び平安時代の遺構・遺物が出土している。

堂山遺跡は国道221号線沿いの高崎町との町境付近、標高170m程の独立丘陵状を呈し、北側眼下に大淀川の支流である丸谷川が蛇行しながら南流している。

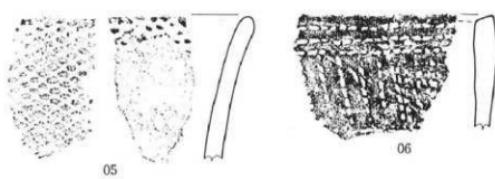
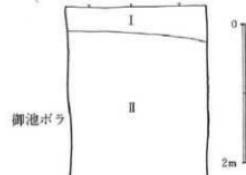
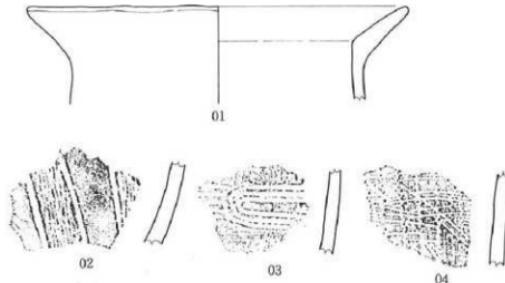
遺跡の基本土層層序は地表面から深さ12m程度で約30に区分でき、アカホヤ層（V層）下の第Ⅸ層から第Ⅹ-C層までに縄文時代早期の遺構・遺物が出土している。遺構は土壌・集石遺構・配石遺構等で、遺物は塞ノ神式土器が中心で他押型文土器、貝殻文系土器である。石器は磨石・石鎚等の他剝片がかなり出土している。（矢部）



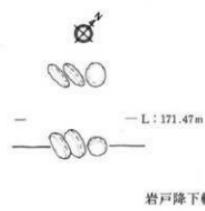
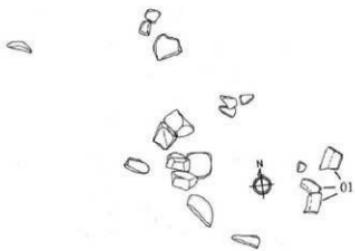
堂山（南地区）遺跡空中写真



堂山（南地区）遺跡グリッド配置図

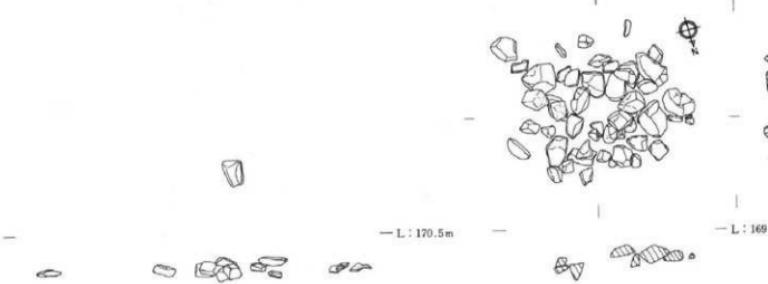


0 10cm



岩戸降下軽石

— L : 169.9m —



堂山遺跡(南地区)遺構・遺物実測図

VI. 牟田ノ上遺跡

所在地 都城市早水町4503番地他
調査主体 都城市教育委員会
調査期間 平成2年9月12日～平成3年3月
10日
調査面積 約12,000m²

この調査は健康福祉センター建設に伴う周辺開発予定地の発掘を行ったものである。立地は鰐塚山地の西側に拡がる扇状地の端部にあたり、遺跡の北側を扇状流水の湧水点を源とする小河川が西流し、大淀川に注いでいる。一帯は島津荘の中心地であったと推定されている。周辺に目を転じると、東方500mに所在する早水神社では平安時代の経筒が出土している。また、北方1kmの祝吉・郡元地区では弥生時代の集落跡や中世の館跡・集落跡が見つかっている。

遺構・遺物は縄文時代、弥生時代、平安～鎌倉時代の各時期のものが発掘されている。弥生時代の遺構は後期の竪穴住居跡9軒、周溝状遺構2基、掘立柱建物跡1棟があり、それらに伴って、土器、石器（石庵丁や砥石）、鐵器（やりがんなや鐵鎌）、炭化材などが出土している。平安～鎌倉時代の遺構は掘立柱建物跡19棟、溝状遺構十数本、土壙墓数基が確認されている。建物は柱間約2mの2間×3間のものを基本として、他に1間×2間や1間×3間のものも見られる。溝状遺構には南北方向のものと東西方向のものとがあり、前者は規模が大きく、調査区全体を縦断するものがある。その中の1号溝と4号溝は床面に30～40cmおきに楕円形のくぼみがあり、表面がつきかためられたように硬化している。

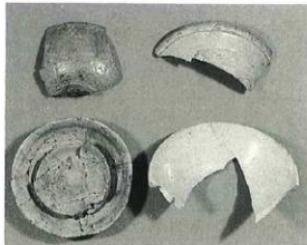
(発掘)



▲牟田ノ上遺跡周辺地形図



▲1号溝(北から)
床面に凸凹があり、
表面が硬化している。
幅約2m



▲牟田ノ上遺跡出土の土師器・陶器



▲ 卍田ノ上遺跡全景(南から)



▲ 2号住居跡(北から)



▲ 2号住居跡内高环出土状況



▲ 5号住居跡内炭化材検出状況



▲ 7号住居跡(南から)



▲ 6号住居跡(南から)



▲ 変形土器(タタキ調整)出土状況

牟田ノ上遺跡検出遺構・遺物

VII. 屏風谷第1遺跡

所在地 都城市上水流町4201

調査主体 都城市教育委員会

調査期間 平成3年1月24日～3月

13日

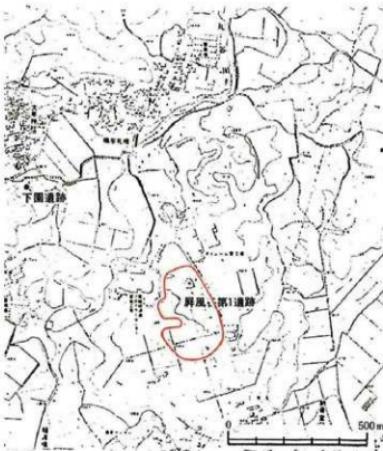
調査面積 750m²

本遺跡の発掘調査は、都城地区製材業協同組合の上水流町移転に伴うものである。調査区域は、A区（約200平方メートル）、B区（約150平方メートル）、C区（約400平方メートル）の3区に別れている。現在は、A区の調査のみ終了している。

A区は国道221号線からの取り付道路建設予定地の一部分で、重機による表土剥ぎの結果、地表下1メートルは客土層で、その下の御池ボラ層より九つの層で成り立っている。遺物包含層は第9層と第10層であり、出土遺物は、縄文時代早期のものが中心で押型文土器片が11点（山形9点、楕円形2点）、刻目突帯をもつ隆帶文土器片が1点、円筒形土器と思われる条痕文土器片が24点、小型石匙（チャート製）が1点、チャートの剥片が2点、黒曜石の剥片が3点ほど出土している。その他には、焼石を數十点含む礫が200点近く出土しているが、集石などの遺構は検出するにいたらなかった。

その他、B区・C区は現在調査中であり、特にC区においては古墳時代の地下式横穴墓検出の可能性もあり、今後の調査に期待がもてる。

（宮崎県教育庁文化課 吉永真也）

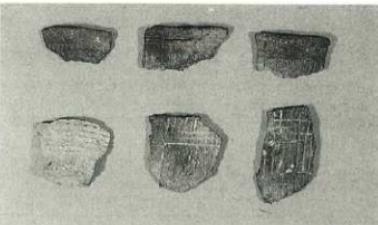


▲屏風谷第1遺跡周辺地形図

*下園道路では壺形の構文土器が採取されている。



▲屏風谷第1遺跡空中写真(東から)



▲屏風谷第1遺跡出土土器(条痕文土器)

IV. 都城市内平成元・2年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査員	時代	調査
4012	向原第1・2	都城市立野町3764番1他	平成元年 4.24~ 4.27	矢部喜多夫	弥生	確認
5027	都之城跡主郭部 (第2次)	都城市都島町字本城	平成元年 5.15~ 6.12	秉烟 光博 重永 卓爾	中世 近世	
4006	久玉 (第2次)	都城市都元町字久玉	平成元年 6.14~ 8.31	矢部喜多夫	中世 近世	
10005	野々美谷城跡	都城市野々美谷町841番地	平成元年 7. 4~ 7. 7	秉烟 光博	中世	確認
4012	向原第1・2	都城市立野町3764番1他	平成元年 7.24~12.27	秉烟 光博 重永 卓爾	弥生 古墳 中世	
10005	野々美谷城跡	都城市野々美谷町841番地	平成元年 8.28~ 9.22	秉烟 光博	中世	
	竹山・胡麻ヶ野地区	都城市美川町字竹山、胡麻ヶ野	平成元年12.12~ 平成2年 2.28	矢部喜多夫	繩文	確認
5027	都之城跡主郭部 (第3次)	都城市都島町字本城	平成2年 1.12~ 5.14	秉烟 光博 重永 卓爾	縄文 弥生 中世	
10040	屏風谷第1	都城市上水流町4201番地	平成2年 3.22~ 3.24	矢部喜多夫	古墳 中世	確認
5023	取添第2遺跡	都城市都島町506番地	平成2年 4.23~ 4.27	矢部喜多夫	中世 近世	確認
5027	都之城跡(第4次)	都城市都島町字本城	平成2年 5.15~ 8.10	秉烟 光博	中世	
5023	取添第2遺跡	都城市都島町506番地	平成2年 5.22~ 7.21	重永 卓爾	中世 近世	
4006	久玉 (第3次)	都城市都元町字久玉	平成2年 5.29~ 8.10	矢部喜多夫	中世 近世	
10046	下大五郎	都城市丸谷町3087-1番地他	平成2年 6.18~ 8.31	山田洋一郎	弥生	
10037	妙見原第2	都城市下水流町3377-1番地他	平成2年 7. 2~ 7.31	吉本 正典	古墳	
10040	屏風谷第1	都城市上水流町4201番地	平成2年 8.20~ 8.31	秉烟 光博	縄文 弥生	確認
4009-2	早田ノ上	都城市早水町4503番地	平成2年 9.12~ 平成3年 3.10	秉烟 光博	縄文 弥生	
10065	嵐山(南地区)	都城市丸谷町2351-1番地	平成2年9.12~平成3年3.31	矢部喜多夫	縄文	
9001	宮ノ下	都城市金田町1228-21番地	平成2年11.19~ 平成3年12.18	林 喬子	弥生 平安	
6013	西原第2	都城市久保原町8602番地他	平成2年11.28~12. 8	矢部喜多夫	縄文 弥生	確認
10040	屏風谷第1	都城市上水流町4201番地	平成3年 1.24~ 3.13	吉永 真也 飯田 博之 東 慶章	縄文 弥生	
10028	桑池地下式横穴墓	都城市下水流町2569番地	平成3年 1.29~ 2. 2	矢部喜多夫	古墳	
	平田かくれ念仏洞	都城市乙房町平田	平成3年 3.13~ 3.14	秉烟 光博	近世	測量
5018	油田	都城市五十町1509番地他	平成3年 3.18~ 3.23	秉烟 光博	縄文 弥生	確認

IX. 都城市内出土遺物補遺

築池地下式横穴墓

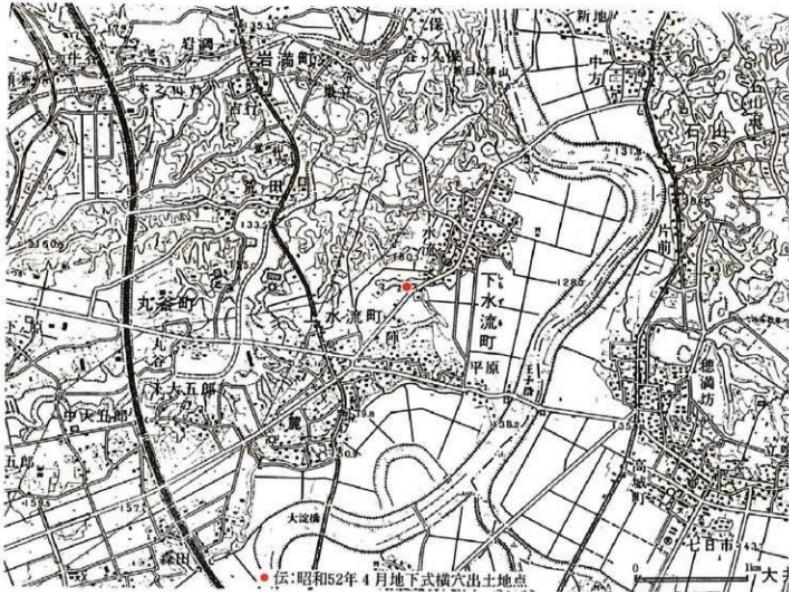
1. はじめに

築池地下式横穴墓群は都城市下水流町に所在する。

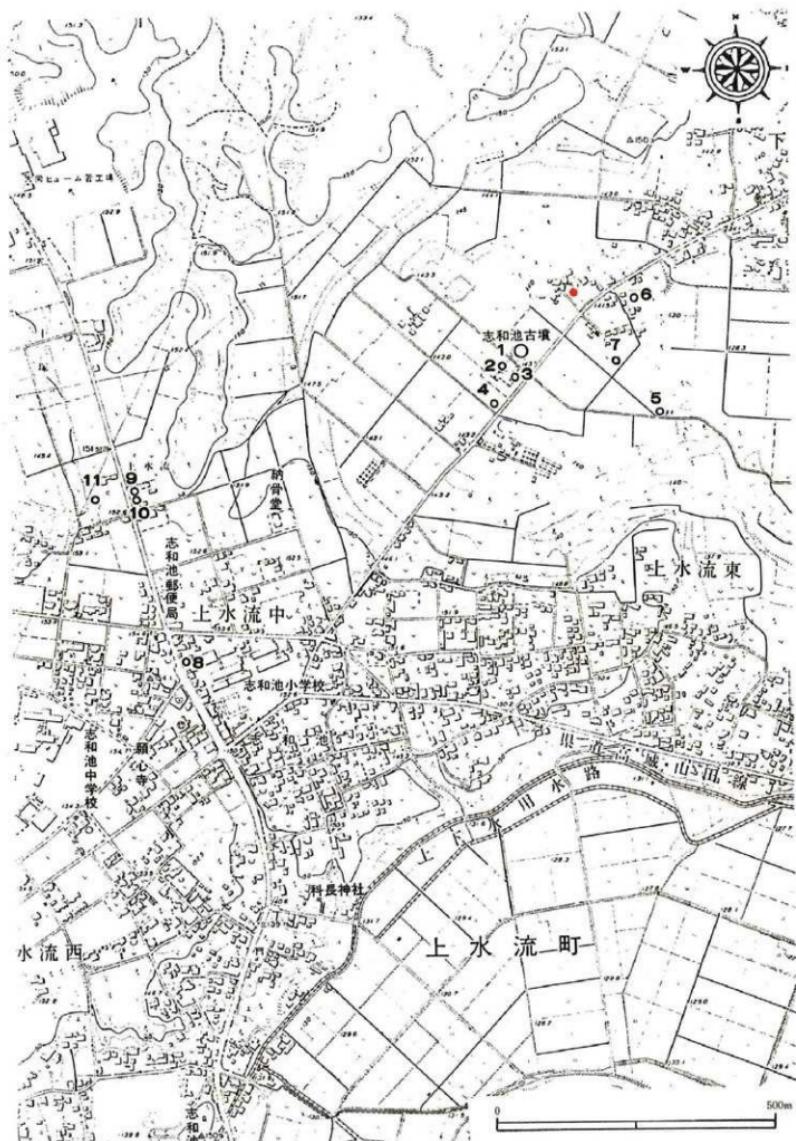
都城市下水流町は都城市的の北部、霧島山系の裾野東端に位置し、高城町と高崎町に隣接している。東の高城町との境には大淀川、北の高崎町との境には高崎川、西には丸谷川と大きく周囲を河川に囲まれている。築池地下式横穴墓群は下水流町の東側、大淀川西岸の水田地帯にせまる台地に位置している。水田面との比高差は約10m程度である。また、同台地には志和池村古墳群（前方後円墳1基、円墳10基、地下式横穴1基）が県指定となっている。築池地下式横穴は、過去、昭和48、52、53、59年、平成3年にそれぞれ1基ずつ発掘調査を行っている。

2. 築池地下式横穴墓第52-1号（仮称）

今回紹介する地下式横穴は、記録によると昭和52年4月17日に畑地耕作中に発見されている。昭和52年4月27日付の新聞記事から抜粋すると「…古墳は深さ2mの縦穴、縦穴から2.3mの羨道（せんどう）玄室が横に伸び、玄室の高さ1.4m。身長140cm程度の人骨が埋葬してあった。出土品の白銅鏡は直径8.1cm。丸形で人骨の胸に置かれていた。玉は人骨の左右の手首にはめられており、腕輪らしい。直径2~5cmのガラス製らしい玉が左43個、右21個。…中略…刀は鉄製、長さ1.5m、幅6mmと92mm、幅4mmの直刀2本。…」と記載されている。この記事から推定すると、築池地下式横穴墓第52-1号は、主軸長2.3m程の中程度の規模の大きさで、平面形態が平入り型のものである。人骨1体、副葬品が直刀2振、鏡1面、ガラス玉64個である。



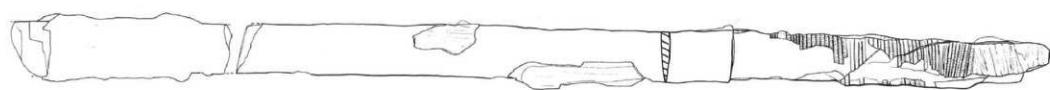
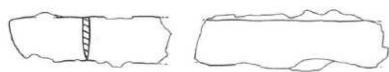
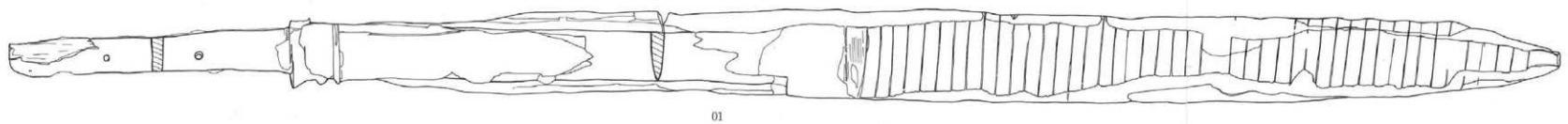
第1図 遺跡位置図



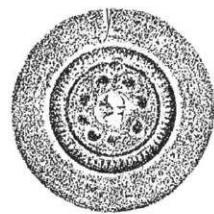
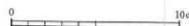
県指定 志和池村古墳 1-前方後円墳 2~6・8~11-円墳 7-地下式横穴

●昭和52年4月発見の地下式横穴

第2図 県指定志和池村古墳群分布図



02



03



第3図 築池地下式横穴墓(第52-1号)出土直刀・鍵

3. 副葬品について

直刀 (01)

現存長99.3cm, 茎長18.0cm, 幅2.2cm, 厚さ0.8cm, 刀部長81.3cm, 幅3.0cm, 厚さ0.9cmを測る。刀身部で折れているが、ほぼ完存する。茎先端から6.2cmと12.0cmに目釘穴がある。鞘の木質はかなり残存し、その表面に樹皮を絆状のもので0.9cm間隔でまきつけている。

直刀 (02)

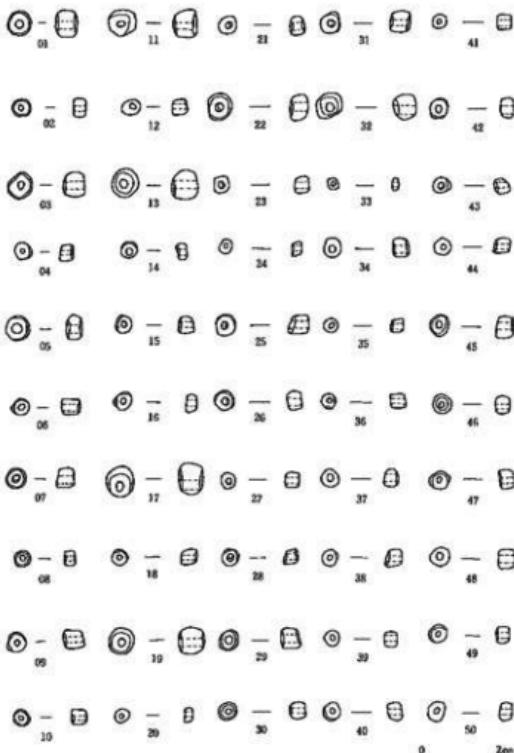
現存長92.8cm, 茎長19.0cm, 最大幅3.0cm, 刀部長(推定)73.8cmを測る。柄の木質はほぼ残存し、径2mmほどの紐で間隔なく縦位にまきつけられている。刀身部は4・5ヶ所欠損し、腐蝕により原形をとどめない。鞘の木質は部分的に遺存している。

小形彷彿鏡 (03)

新聞記事によると、本鏡は玄室内の人骨の胸部に副葬されていたようである。鏡は平縁の獸帶鏡で、径8.2cm, 厚さ2mmを測り、背面の内区は4ないし8つの獸形が8つの乳に省略されている。次に内区に接して鋸歯文がめぐり、外区の縁は素文で若干反っている。鏡は両面とも全体に綠銹化し、淡青色を呈している。

ガラス玉

出土状況は『…人骨の左右の手首にはめられて、…』と記載されているが、その付近に遺存していたと解釈すべきであろう。発見時左手首に43個、右手首に21個のうち、現存しているのは前者が32個(01~32)、後者が18個(33~50)である。最小径33の0.3cmから最大径17の0.71cmまでと幅広い。色調はコバルトブルー(04.08.10.14.20.35.39.41.44.47)、淡青色(01.02.03.05.07.12.13.15.16.18.19.21.22.23.24.26.27.28.29.30.31.32.33.34.36.37.43.46.48.50)、深青色(06.09.11.17.25.38.40.42.45.49)である。



第4図 筑波地下式横穴墓(第52-1号)出土ガラス玉実測図

墓池地下式横穴墓(第52-1号)出土ガラス玉法量														
番号	長さ	径	孔径	重さ	番号	長さ	径	孔径	重さ	番号	長さ	径	孔径	重さ
01	0.55	0.55	0.20	0.36	18	0.42	0.35	0.15	0.10	35	0.35	0.40	0.1~0.2	0.07
02	0.30	0.45	0.15	0.10	19	0.60	0.65	0.20	0.47	36	0.45	0.41	0.15	0.13
03	0.55	0.60	0.20	0.29	20	0.25	0.40	0.12	0.06	37	0.35	0.50	0.18	0.12
04	0.30	0.40	0.10	0.09	21	0.35	0.50	0.20	0.14	38	0.50	0.41	0.13	0.15
05	0.40	0.70	0.30	0.21	22	0.45	0.70	0.22	0.32	39	0.35	0.43	0.18	0.09
06	0.50	0.40	0.15	0.13	23	0.35	0.45	0.20	0.11	40	0.38	0.45	0.13	0.12
07	0.45	0.55	0.20	0.21	24	0.23	0.40	0.13	0.08	41	0.40	0.40	0.13	0.13
08	0.27	0.40	0.15	0.07	25	0.55	0.50	0.20	0.26	42	0.35	0.50	0.20	0.14
09	0.50	0.50	0.15	0.19	26	0.41	0.52	0.20	0.17	43	0.41	0.45	0.20	0.10
10	0.40	0.40	0.15	0.10	27	0.40	0.45	0.18	0.12	44	0.45	0.40	0.15	0.15
11	0.60	0.70	0.25	0.43	28	0.40	0.45	0.20	0.13	45	0.41	0.48	0.20	0.18
12	0.42	0.48	0.17	0.15	29	0.50	0.55	0.20	0.26	46	0.40	0.50	0.15	0.12
13	0.65	0.70	0.20	0.53	30	0.45	0.47	0.15	0.16	47	0.40	0.43	0.15	0.17
14	0.28	0.42	0.20	0.08	31	0.52	0.53	0.15	0.26	48	0.40	0.46	0.18	0.14
15	0.43	0.45	0.15	0.12	32	0.57	0.70	0.21	0.44	49	0.35	0.43	0.15	0.12
16	0.28	0.39	0.15	0.13	33	0.21	0.30	0.13	0.04	50	0.32	0.45	0.15	0.13
17	0.62	0.70	0.25	0.54	34	0.43	0.55	0.20	0.15					

4.まとめ

墓池地区において今まで5基の地下式横穴墓が発掘調査されている。しかし、調査数以上の地下式横穴が、過去、未調査のまま破壊されていることは、残存する遺物（副葬品）の数が如実に物語っている。誠に残念なことである。今回紹介する仮称第52-1号地下式横穴墓は偶然にも新聞に記事として掲載されたことから、出土遺物の他に、地下式横穴の形態が概略つかめたことは貴重な記録となっている。

第52-1号地下式横穴墓と5基の調査した地下式横穴墓の形態は下表のとおりである。

地下式横穴墓	平面形態	堅穴(cm)	奥行×巾×高さ(cm)	玄	高	周葬品	人骨
第52-1号(仮称)	平入り(確定)	不明	140	不明	蛇形-1, ガラス玉, 紅刀-2	1	
第48-1号(仮称)	妻入り	方 形	135×162×120	不明			1
第52-1号(仮称)	妻入り	構丸長方形	235×160	不明			1
第53-1号(仮称)	妻入り	長方形	292×135	不明			1
第59-1号(仮称)	妻入り	不明	270×135	不明	蛇形劍-1	1	
第1991-1号(仮称)	平入り	方形 205×140	210×90×60	ドーム	刀子-1, 土師器-1	1	

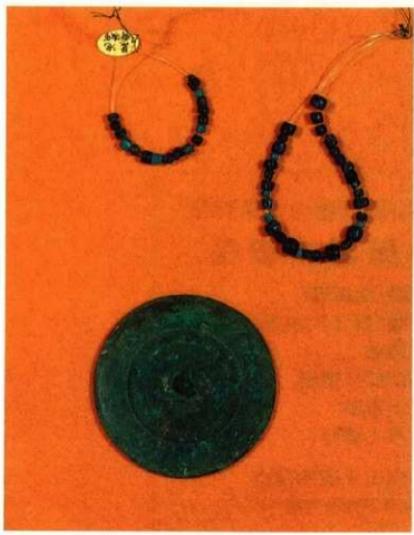
妻入り4基の地下式は位置が隣接し、平入りの2基は第52-1号が聞き取りによるが、妻入りタイプの西ないし西北方向のやや離れた地点に位置している。また、都城市内では鏡の出土はこの一面しかなく、同様の彷彿の獸帶鏡はえびの市の小木原地下式横穴3号と鹿児島県大崎町の天子ヶ丘古墳から出土している。(矢部)

注1) 朝日新聞 昭和52年4月27日付

注2) 田中茂「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について」宮崎県総合博物館「研究紀要」昭和48年度

「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(1)」宮崎県教育委員会 1972

注3) 第17回黎明館講演会(昭和61年5月)「旅籠 古代日本の音楽器」の資料



都城市文化財調査報告書第13集
遺跡発掘調査概報

都之城跡(主郭部)
久玉遺跡(第3次調査)
宮ノ下遺跡
堂山(南地区)遺跡
牛田ノ上遺跡
屏風谷第1遺跡

都城市内出土遺物補遺
築池地下式横穴墓

発 行 都城市教育委員会
都城市姫城町6街区21号
印 刷 鹿都城印刷
都城市早鉢町1618番地